

# 外陣講義文書

「第1講義文書」  
(0 = 0 プロベイショナー)

## 第5章

### 大天使のイメージ

- |   |               |
|---|---------------|
| 1 | 天使とは何か        |
| 2 | カバラ的天使観と魔術の応用 |
| 3 | テレズマ的イメージ     |
| 4 | 四大照応の大天使の座    |
| 5 | 獅子のカバラ        |
| 6 | カバラ十字と位階のサイン  |
| 7 | 小五芒星の儀式       |
| 8 | 小五芒星儀式の応用     |
- 瞑想課題：炎の凝視

**THE OFFICIAL ORGAN  
OF  
I::O::S::**

**PUBLICATION IN CLASSES C~D  
IMPRIMATUR: M FRATER I::O::S::**

First published in 1986 by I::O::S:: private edition (ver.1).  
Second published in 1998 by Sekibunsha (ver.4).  
Third published in 2005 online versions by I::O::S:: (ver.5).  
This Edition Fourth, Revised and Expanded in 2013 (ver.6).  
All rights reserved. © Tzutom Akibba 1986, 1998, 2005 and 2013

# 知識講座

## 1 天使とは何か

### (1) 天使の伝統的な姿

天使、すなわちヘブル語では מלאכי (マラキム、御使い)、ギリシャ語では αγγελος (アγγελロス)、ラテン語では angelus (アンゲルス)、英語の Angel は、『聖書』を始めとする様々な聖典、文学作品を飾ってきた。

天使は神の特定の機能を体現する霊的存在である。本来は、定まった形も姿もない。<sup>(1)</sup> 天使存在は、人間と相対する場合は、人間が(無意識に)定義する姿を帯びる。そのため、様々な伝承において、美しい人間の姿を顕し、羽をもち宙に舞う。戦車に乗り (ἡνιοχος ἄρματος 戦車の御者)、或いはその周囲に浮遊する場合もある。

天使は「抜き身の剣」(『民数記』22.23、『ヨシュア記』5.13)や「滅ぼす武器」(『エゼキエル書』9.2)により武装し、騎乗(『ゼカリヤ書』1.8)している場合がある。この武装天使のイメージの最たるものは、「主の天使が天と地との間に立ち、手に抜いた剣をもち都に差し掛けていた。」(『歴代志 上』21.16)というものだ。ここで「主の天使」というのは、ヘブル語で מלאכי יְהוָה (マラキ・ヤーウェ) という懲罰を担当する天使である。

天使は人間形をしているが、超人的な相貌を有する。たとえば、「亜麻布の衣を着、ウパズの黄金の帯を腰にしめていた。その身体は緑柱石のごとく、その顔は電光のごとく、その目は燃える松明のごとく、その腕と足は磨いた青銅のように輝きその言葉は群衆の声のようであった。」(『ダニエル書』10.5-6)

天使は特別な任務を与えられ、神の権能の媒介者として人間に対する。そのためマラキ(伝令)と呼ばれるのである。

### (2) 天使の位階

しかし、古くからキリスト教徒の神学者のあいだで問題になっていたテーマがある。

「何故、熾天使という最高階級を極めていたはずのルシファーが、大天使の位にあったミカエルに追い落とされたのか」である。「善は常に悪に勝つ」という安易な答えは許されない。これを神の威光を背景として勝ったのだとか、熾天使と大天使の職能は、侍従長と將軍のようなものだとか、色々無理な説明がなされている。また、ルドルフ・シュタイナーなどは、大天使が地上の人間に直接接触する最高位の天使なので、われわれの伝説では大天使の役割が多く、その力を過大視するのだという珍説まで持ち出した。結局のところ、かれらキリスト教的天使論は、この矛盾を解決せずに呑み込んでいる。

この考え方の背景には、第9階級の「熾天使」ルシファーが、第2階級の「大天使」ミカエルに負けたという誤解があった。しかし、カバラの天使論では、両者はともに大天使である。両者の違いは絶対的な霊的権能の異なる階級の違いではなく、単に与えられた職責の違いだけである。

この混乱の原因は、聖書の曖昧な記述にあり、さらに根本的な問題はヘブル語で書かれた『旧約聖書』とギリシャ語で書かれた『新約聖書』の微妙な違いにある。本来、聖書のなかで天使の階級制度について明確に記述された部分はない。後代の神学者が勝手に推測したのである。しかも、ユダヤ秘教のカバラ伝承者とキリスト教神学者の間には、大きな認識の相違があった。

---

(1) Charles A. Gieschen, *Angelomorphic Christology Antecedents & Early Evidence*, Leiden : Koninklijke Brill, 1998, pp.27f.

キリスト教の天使論は新プラトン主義に触発されて発展した。静岡大学の今義博は、次のように総括する。

「・・・プロティノスは初期の教父（ギリシア教父もラテン教父も）にとっての源泉であり、プロクロスはより後の特に偽ディオニュシオス・アレオパギテス（600年頃）や、証聖者マクシモス（7世紀）などにとっての源泉であった。ラテン世界に限定すれば、それら二つの源泉は9世紀のエリウゲナにおいて合流する。偽ディオニュシオスを介して、エリウゲナに至ったプロクロスの他者性の概念は中世末期（あるいは近世初期）のクザーヌスにまで流れ続ける。」<sup>(2)</sup>

プロクロスは神＝天使の階級を九つに分け、それぞれが三つの位階に振り分けられるものとした。この概念を積極的に取込んだのが、中世の教会に広く普及したディオニュシオス・アレオパギテス（いわゆる偽ディオニュシオス）の『天上位階論』である。

偽ディオニュシオスは、天使は二種類の三幅対、すなわち各三隊構成の三階級に分けられると説かれた。

「神のことばが、天上の存在のすべての特徴を明示する九つの名称で呼んだのである。われらが聖なる伝承者（ヒエロテオス）は、それらの諸存在をそれぞれが三隊から成る三つの階級に区別している。（私の師である）彼の言うことには、第一の階級は神のまわりに永遠にいる階級であり、直接神に隣接し、ほかの階級よりも前に無媒介に神と合一していると伝承されているのである。実際、いとも神聖なる「王座（座天使）」と、ヘブライ語で「ケルビム（智天使）」と「セラフィム（熾天使）」と呼ばれる、たくさんの目とたくさんの翼をもっている隊は、すべての隊より上の近いところで髪の上に無媒介に存在している旨、聖書の啓示が伝えていると彼が言っているのである。確かにわれらが誉れ高き師は、三つの隊から成るその階級は一つの、同じ階級を成す、真に第一の位階であると言っていたが、それ以上神に似ている位階はなく、神性の根源から第一次的に生じる照明にそれ以上無媒介に隣接している位階はないのである。第二の階級は、「能力（能天使）」と「主権（主天使）」と「力（力天使）」により構成されており、第三の階級は天上の位階の最後にあつて、それは「天使」、「大天使」、「権勢（権天使）」という階級であると師は言っている。」（今義博訳）<sup>(3)</sup>

これを整理すると下表のようになる。

第1階層	熾天使、智天使、座天使
第2階層	主天使、能天使、力天使
第3階層	権天使、大天使、天使

この天使階級の権天使と力天使の位置を逆転させたコピーが、大グレゴリウス（ニッサのグレゴリウスと混同しないこと）によって、西方（カトリック）教会にも伝わった。以後、盲目的な権威への信仰により批判されることなく継承されていく。

しかし、この階級序列からすると、神聖原理と直接交流可能な熾天使と、第2階層を通じてしか神のエネルゲイアに接することのできない大天使の権能の差異は明らかである。最初に提

(2) 今義博『古代末期から中世における「他者性」』<http://anthropos.hss.shizuoka.ac.jp/shizutetsu/kon.htm>

(3) デイオニュシオス・アレオパギタ「天上位階論」『中世思想原典集成 3 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』平凡社、1994年、374、375頁。

なお、ギリシア語原文との対訳については、下記のURLで参照できる。

[http://www.medieviste.org/scr2/archives/cat\\_celestial\\_hierarchy\\_2.html](http://www.medieviste.org/scr2/archives/cat_celestial_hierarchy_2.html)

起された矛盾は解決しない。以来、キリスト教神学は不毛な論議を積み重ねていった。曰く、開いた掌に天使は何人乗るのだろう。等々・・・

この序列は『ヴルガダ聖書』の聖パウロの言葉の解釈によって生まれた。『新約聖書』ラテン語版を紐解くと、『エペソ書』1:21及び『コロサイ書』1:16に二つの記述がある。<sup>(4)</sup>

「すべての支配（プリンキパトゥム）、權威（ポテスタテム）、権力（ヴィルトゥテム）、主権（ドミナティオネム）の上に…（supra omnem principatum et potestatem et virtutem et dominationem---）」  
 「…王座（トロニ）も、主権（ドミナティオネス）も、支配（プリンキパトス）も、權威（ポテスタテス）も…（sive throni sive dominationes sive principatus sive potestates）」

偽ディオニシオス・アレオパギタは、この部分から天使の五階級を導き出した。

座天使（トロニ）  
 主天使（ドミナティオネス）  
 力天使（ヴィルトゥテス）  
 能天使（ポテスタテス）  
 権天使（プリンキパトス）

そして『新・旧約聖書』の他の部分から、残りの四階級を取り出した。

熾天使（セラピム）（旧・『イザヤ書』6：2）  
 智天使（ケルビム）（旧・『エゼキエル書』1：5）  
 大天使（アルカンゲリ）（新・『ユダの手紙』9）  
 天使（アングリ）（旧・新のあちこち）

最終的には、先の配列に直してその著書『天上位階論』で発表したのである。これらはキリスト教徒の観点である。<sup>(5)</sup>

代表的なキリスト教の天使位階の分類を次に示す。<sup>(6)</sup>

	聖アンブローズ	聖ジェローム	聖グレゴリオス	偽ディオニシオス
1	熾天使	熾天使	熾天使	熾天使
2	智天使	智天使	智天使	智天使
3	主天使	力天使	座天使	座天使
4	座天使	能天使	主天使	主天使
5	権天使	座天使	権天使	能天使
6	力天使	大天使	力天使	力天使
7	能天使	天使	能天使	権天使
8	大天使	-----	大天使	大天使
9	天使	-----	天使	天使

(4) VULGATA II, Deutsche Bibelgesellschaft, 1969, pp.1809, 1821.

(5) 古来の天使位階論については、ミランダ氏のホームページに詳しい。

<http://www.joy.hi-ho.ne.jp/sophia7/x1-anges.html> <http://www.joy.hi-ho.ne.jp/sophia7/x2-anges.html>

(6) Gustav Davidson, *A Dictionary of Angels including the fallen angels*, New York : The Free Press, 1971, p.336.

一方、ユダヤ教の定義では2種類の天使的存在がある。

初期のラビ文献によると、天使的存在を神の家令に例えて上位と下位の2種類に区分している。その際、上位の天使的存在を **העליון** 「上なる者」、**פמל"א של מעלה** 「上級家司」と呼び、下位の天使的存在を **התחתון** 「下なる者」、**פמל"א של מטה** 「地の家僕」と呼ぶ。

後世の秘教的視野においては、上記は単純に「大天使」と「天使」に区分された。

この区分のほかに、当然ながら役職名が多数存在する。上位存在である「大天使」には、単なる天使長から各宰相 (כֹּהֵן) までの役職が振り分けられている。

例えば **לצבא** 「主の軍勢の宰相」(『ヨシュア記』5.15) などのほか、高位の役職群の上席を占める者として、メタトロンが筆頭宰相を努める **שר התורה** 「律法の宰相」、**שר המלכות** 「夢幻の宰相」、**שר המראה** 「相貌の宰相」などがある。

律法の宰相は、翼を畳んだ長身の白く輝く法衣を纏う成人の天使として顕現する。大地と同じぐらい高齢のように見えるが、その顔は赤く輝いており、幼子のように若々しく見える。<sup>(7)</sup> それでは階級に話題を戻す。

大天使 (ラブ・マラクム：大いなる御使い) は、神のひとつの側面を一人で表現する神格であり、偉大なる権能を有している。選ばれた十名の大天使は、次に述べる十の天使団を直率する軍団長でもある。もちろん、前述したように十大天使以外にも大天使はいる。

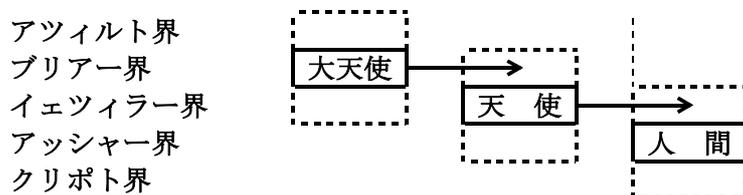
天使 (マラクム：御使い) は通常は集団で働き、神の十機能に応じた十の位階に便宜的に振り分けられている。我々が、通常、感知しうるのはこの天使団の「制服」をまとった天使のイメージである。

一説によれば、個々の天使とは神の機能を実現する神性の断片に過ぎず、人格も、知性もない。人型をしているのは、人間がそうイメージするからであって、本来は形もない蜂の巣のような複合体である。そして、すべての断片が集まると大天使となる。<sup>(8)</sup>

つまり、両者は存在の次元から違うのである。

天使はイェツィラー界の住人だが、大天使はブリアー界の住人である。自ずと、持てる力も、界を越える存在範囲も違う。天使は、主としてイェツィラー界とアッシャー界に重複して存在する。一方、大天使は主としてブリアー界とイェツィラー界に重複して存在する。どちらも、それを越えた上と下の界に通行することはできるが、存在の振動率が違い過ぎて長時間安定して顕現するのは困難である。

さらに厳密に言うと、天使は人間のイェツィラー領域に働きかける。人間の靈魂のうち、ルアクと呼ばれる領域はイェツィラー界に到達している。そこに天使の沈黙の声が語りかける。



人間はそれを天啓、前兆、良心の声などと呼ぶ。

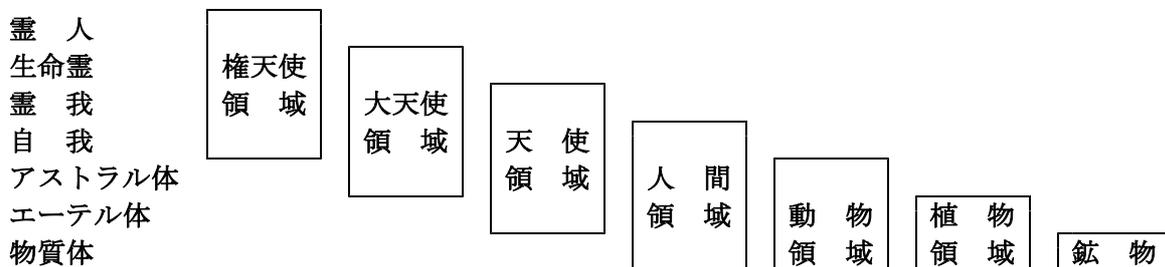
それでは大天使はどうするのか？ 大天使の主存在領域であるブリアー界に到達する人間の靈魂はネシャマーと呼ばれる。神性の火花である人間の靈魂には、ネシャマー領域も伏在している

(7) メタトロン伝承には、長老エノクが昇天し変容したメタトロンは、天文学的な寿命をもつ他の天使たちより若いので「若者」(Yenuka) と呼ばれる件がある。

(8) Josephine McCarthy, *Magical Knowledge Book II The Initiate*, Oxford : Mandlake, 2011, p.25.

が、聖職者、義人、特殊な修行をした者のほかは、活性化されていないため直接語りかけることは困難である。従って、大天使は天使に意志を伝達し、天使をして働かしめるのである。

ルドルフ・シュタイナーは、人智学の天使論において人間と天使、天使と大天使等の比較として、上記を存在の領域として定義した。<sup>(9)</sup>



天使は霊我からエーテル体に至る存在の領域を有しているのので、人間領域から植物領域までに働きかけることができる。植物はエーテル体をもつので、その共通の存在領域を通して働きかけるのだ。しかし、物質体しかもたない鉱物領域に働きかけることはできない。

大天使は1段階高い存在領域にあるので動物領域まで働きかけることができる。従って、大天使にとって植物相は空洞のようなものである。以下、9階級の天使的存在は1段階づつ存在の領域を登るので、通常の場合、人間領域に何らかの干渉ができるのは権天使までとなる。通常の場合と限定したのは、人間のなかにも霊人の領域を発達させたアデプトならば、それ以上の天使的存在と交信できると説明されているからだ。

I :: O :: S :: では、上記の9段階天使説を採用していない。しかし、考え方自体は大いに参考になるので紹介した。

なお、人智学的解釈によると動物領域では未発達の意識が、植物には集団意識が、鉱物には進化の初期段階の暗い意識が存在する。これらと存在領域を重複させた人間が魔術的な力を行使する場合は、それぞれの意識レベルに働きかけることとなる。従って、深淵なる魔術の高みに達した者は、そのような魔術的な力を行使する是非を論議することなければ、鉱物である山を動かし、海水を割ることも可能となるのである。

再びカバラの天使論に戻ると、大天使の召喚が難易度の高い術であることを理解できるだろう。大天使にとってのアツィルト界／アッシャー界と、天使にとってのブリアー界／ヘーペク・アッシャー界は、いずれも存在するために意識的な努力を必要とする世界である。それ以上に存在範囲を広げるのためには、著しいエネルギーの消費を要求することになる。

それでは一方の墮落した御使いの司（大天使）たるルシファー／サタンは、どんな存在だったのだろうか。ルシファーとサタンは、しばしば、同一視されてきた。サタンという名前は、この世の君主、試みる者として『旧約聖書』に登場する。一方、ルシファーは後世になってから与えられた名称であり、『イザヤ書』14:12～15に「暁の子、明けの明星よ。どうして、あなたは天から落ちたのか。国々を打ち破りし者よ。どうして、あなたは地に切り倒されたのか。あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々の遥か上に私の王座を上げ、北の果ての会合の山に座ろう。密雲の頂きに上り、いと高き方のようになろう』しかし、あなたは冥府に落とされる」とある「明けの明星」を解釈して付けられた名称である。これらは同じ墮天使を表すのであろうか。

サタンについては、グノーシス主義の異端ボゴミール派の伝承が興味深い。主神には二人の息子がおり、兄がサタナエルで、弟はキリストであった。兄サタナエルは、最高の長所を備え、神の補佐役として、その右手に席を得ていたが、思い上がって反逆し、天使の3分の1を率いて神と戦った。負けて情状酌量され、天界から放逐されたサタナエルは、第2の天として地球を創造

(9) ルドルフ・シュタイナー『天使と人間』イザラ書房、1995年、15-19頁。

し、神の力を借りて支配するために人間を創造する。ところが、人間の苦難を見たキリストが受肉して十字架にかかり、再度、負けたサタナエルは地獄に放り込まれる。この第2の墜落のとき、サタナエルから神性を表す接尾語「エル」が抜け落ち「サタン」になった。というものだ。アルコンによる現界の創造というグノーシス主義の神話をキリスト教風味で解釈したものだが、なかなか面白い。

ユダヤ教の正当派解釈では、サタンも権能を有する天使のひとりである。

モーゼス・マイモニデスは、サタンとは外部の霊的存在ではなく人間の「悪の性向」であるとしている。人間には善悪の性向があり、善の性向を人間の右側に立つ善の天使が、悪の性向を人間の左側に立つ悪の天使が代表する。<sup>(10)</sup>

さらに、ミドラシュを解釈して、天使の権能を「想像力」であるとしている。<sup>(11)</sup>

代表的な天使の階級組織は、次のとおりである。<sup>(12)</sup>

	モーゼス・マイモニデス	ゾーハルの書	マセケト・アツィルト
1	カイオト ハ・カデシュ	マラキム	セラフィム
2	オフアニム	エレリム	オフアニム
3	アラリム	セラフィム	ケルビム
4	カシュマリム	ハイヨース	シンナニム
5	セラフィム	オフアニム	タルシシム
6	マラキム	ハムシャリム	イシム
7	エロヒム	エリム	ハシュマリム
8	ベニ・エロヒム	エロヒム	マラキム
9	ケルビム	ベニ・エロヒム	ベニ・エロヒム
10	イシム	イシム	アレリム

注：14世紀初期の文書『מסכת אצילות (マセケト・アツィルト)』は、アッシャー界に10セフィロトに対応する天使群を設置した。<sup>(13)</sup>

(10) Moses Maimonides, *The Guide of the Perplexed*, Vol.2, Chicago: The University of Chicago Press, 1963, p.490.

(11) Op. cit., pp.264-265.

(12) Gustav Davidson, op. cit., pp.336f.

(13) Gershom Scholem, *Kabbalah*, New York : A Meridian Book, 1974, p.119.

Gershom Scholem, *Major Trends in Jewish Mysticism*, New York : Schocken Books, 1941, p.406, n.118.

## 2 カバラ的天使観と魔術の応用

キリスト者の解釈によれば、ルシファー／サタンは同じ存在である。最高位の天使でありながら、高慢の故に神に反逆し、仲間の天使とともに地獄に投げ落とされた霊。しかし、秘教の学徒は別の視座を持っている。

サタンは、「絶対的な否定する霊」である。その属性は、氷山のように厳しく閉ざされた悪魔であり、血の中に流れる霊を凍らせ、実現しなかった人の希望を支配している。

一方、ルシファーは、「光をもたらす者」である。

燃え上がる炎の霊であり、その破壊的なエネルギーで自他ともに傷付けることがあるが、人間に試練を課す役割についている。生命の木の上における配列は、サタン（寒の霊）は10番（逆位置のケテル）であるのに対して、ルシファー（熱の霊）は11番（逆位置のダース）である。

大天使たちが「生命の木」の上に位置を持ち、職務を割り振られているように、魔王たちも、「邪悪の木」の上に位置を持ち、特種な役割を付与されている。

四界との関係でこれを表にすると次のとおりである。

超越界		無限の光 (NON)	
霊界	アツィルト	神の名前	シエム・ハ・メフォラシュ
メンタル界	ブリアー	<u>大天使</u>	ラブ・マラキム
アストラル界	イエツィラー	天使	マラキム
物質界	アッシャー	人間	アダム
霊の物質界	ヘーペク・アッシャー	妖魔	ラダマー
影のアストラル界	ヘーペク・イエツィラー	魔族	ルアク・ラー
影のメンタル界	ヘーペク・ブリアー	<u>魔王</u>	メレキム・ラー
影の霊界	ヘーペク・アツィルト	魔神の名前	シエム・ハ・シャディム
影の超越界		無限の闇 (MON)	

我々の光の世界と、魔族らの影の世界は、物質界を接点として上下逆さまに生えた1対の木の形をしている。その根はお互いに絡み合い、梢は絶対的な《光》と、《闇》を目指して枝葉を茂らせている。

巨大なこの宇宙図(マンダラ)の中に、総ての存在は整然と収まっている。我々は通常、神や天使たちに思いを馳せているが、大宇宙の下半分たる「破」の世界を忘れてはいけない。大宇宙に呼応する人間の小宇宙にも、当然、このありがたくない下半分は存在する。それは人間の無意識の中に隠れた古い行動様式である。サタニストたちは、下半分に焦点を当ててその不安定な感情を増幅する。また、一部の信仰家は、上半分だけを取り入れようとする。そのどちらも誤りである。人間の昼の部分支配する天使も、夜部分を支配する魔天使も、等しく彼の魂の一部なのである。その両者を釣り合わせ、豊かな人間性を養うことこそ真の「均衡」の道である。

さて、天使を召喚し、魔術的用途に使役することは可能である。しかし、《生命の木》に属する《光の子ら》を邪しき目的に使うことはできない。いわゆる《灰色の天使》と《闇の天使》の召喚と、これら天使団の降霊を同一視してはならない。

天使団の特徴はその没個性にある。かれらは光の翼をもつ群体であり、強い霊的視覚を持つものには、それぞれの階級が白い波動として捕えられるであろう。しかし、我々が個人として接触を試みる時は、その目的に応じて人間的な形象を与える。さもなければ、巨大な波動のなかの、ひとつの浪頭と会見するようなものだからだ。その際、召喚の術者が男性であれば、女性的なイメージを、女性であれば男性的なイメージを付与することが必要である。むろん、天使に性別はない。かれらは地上の生命体のように繁殖する機能を持っていないからだ。異性のイメージ付与

は、各天使団に固有の象徴を持たせることと同じく、魔術的なリンクージを容易にするための便法である。

また、天使団とはひとつの職能集団と理解することもできる。かれらが同じ形の象徴的武具をまとい、同じイメージに固定されるのは、術者がセフィロトに対応する天使団の中のひとり、ある性格を付与された無個性な天使を求めるためである。この点において、タブレットその他を用いて、個々の天使を名指しで召喚する技法とは違う。その場合、天使のヘブル語の名前が自動的に天使の外観、即ち次に述べるテレズマ的イメージを決定し、術者とは関係なく性別（中性体が男、又は女の表現を取るというだけ）も現れる。

感情を平静に、定められた象徴を用いることにより、次なる天使団と接触が可能だ。



K	ケテル	ChIVTh HQDSh	カイオト ハ カドシュ
Ch	コクマー	AVPNIM	オフアニム
B	ビナー	ARALIM	アラリム
D	ダース)	該等なし	
Chs	ケセド	ChShMLIM	カシュマリム
G	ゲブラー	ShRPIM	セラフィム
Th	ティファレット	MLKIM	メレキム
N	ネツァク	ALHIM	エロヒム
H	ホド	BNI ALHIM	ベニ エロヒム
I	イエソド	KRVBIM	ケルビム
M	マルクト	AShIM	アシム

### 3 テレズマ的姿形

#### (1) テレズマ的姿形とは

高次の霊的存在である天使たちと物質的世界に意識の主軸を置く人間が交わるためには、天使の直接的知覚を希求するよりは、天使のイメージ（姿形）を捉える方が早道である。大天使をイメージするためには、本来、形のないかれらを立体像として捕らえねばならない。そのための技法がテレズマ的姿形（Telesmatic Image）である。

この技術は黄金の夜明け団が内陣用文書『飛翔する巻物』第12巻「テレズマ的姿形」にまとめ上げた概念であり、<sup>(14)</sup> その記述は『黄金の夜明け魔術全書』に収録されている。<sup>(15)</sup>

テレズマとは、護符を意味するギリシャ語 τελεσμοατα（テレズマタ）が英語に転訛した単語である。魔術師が霊的存在を具象化する際に使用する技法の理論が、タリズマンを作成する際と同じであることに由来する。<sup>(16)</sup> 事実、テレズマ的イメージは、魔術イメージとも呼ばれ天使魔術以外にも様々な応用がなされている。<sup>(17)</sup>

テレズマ的姿形の基本的な原理は、天使的存在の名前のヘブル文字を使用して、イエツィラー界またはブリアー界の力流をアッシュャー界に誘導し、結像させるための焦点イメージを設定すること、そして同じ名前の十字架を神聖名振動術式を使用して投射し、焦点イメージを活性化することである。仮に前者を第1原理、後者を第2原理と呼ぼう。

設定し、活性化されたテレズマ的姿形はあたかも実効的な天使であるかのように活動する。従って、遊び半分でテレズマ的姿形を作成することは危険である。

#### (2) テレズマ的姿形の第1原理（イメージの設定）

テレズマ的姿形の第1原理は、文字、色彩、属性を組合せ、それらの総合により、特定の力を象徴するテレズマ的姿形が構築できることである。

たとえばアギエル  という名前の天使がいる。名前以外、何も分かっていない。どんな属性を持つ、どんな姿の男性、または女性形の天使なのだろう。我々はある目的でアギエルを召喚しなければならない。勿論、召喚魔術には対象となる霊の姿をある鑄型に当てはめて、強く想起しなくてはならない。また、ある程度の効果を持たせるためには、イメージを目に見える形で呼び寄せる「視覚化」という作業が不可欠である。

何も判らない相手をどうしたら視覚化できるだろう。アギエルという燃える文字に天使の翼が生えている姿でも想起するのだろうか、平凡な天使の絵でも買ってきて、アギエルとは何の関係もない薔薇色の頬をした子供の姿を思い浮かべるのだろうか。

無論、それは違う。アギエルには、彼女に固有の姿がある。そう、今、私はこの天使を彼女と呼んだ。アギエルは女性形の天使である。それも決めることができる。

天使的存在に限らず、特定の元素的力を働かせるためには力流を描く必要があり、テレズマ的姿形は、その際にも有効である。

(14) フランシス・キング編『飛翔する巻物』国書刊行会、1994年、306頁。

(15) イスラエル・リガルディー編『黄金の夜明け魔術全書』下巻、国書刊行会、1993年、269-271頁及び273-279頁の一部。リガルディーは原本を分解し、自分の適用例を差し込み構成したため、上記のような表現となる。

(16) 『飛翔する巻物』第14巻「護符と閃光タブレット」の付録を記載したマクレガー・マサースは「タリズマン的象徴（The Talismanic symbols）」を「テレズマ的紋章（The Telesmatic Emblems）」と言換えた。

Flying Roll XIV TALISMANS AND FLASHING TABLETS By Frater Sapere Aude (W. Wynn Westcott)

<http://www.osogd.org/library/rolls/roll14.html>

上記注釈は邦訳部分（『黄金の夜明け魔術全書』下巻、257-261頁）に含まれていない。

(17) W.E.Butler, *Practical Magic and the Western Mystery Tradition*, Wellingborough : The Aquarian Press, 1986, pp.83-86.

術者は創造的想像力のなかに存在の名前から形成するアストラル姿形を描く。

名前の最初の文字が姿形の頭部となり、名前の順序に従って適宜、胴体や手足を表現し、最後の文字が足となる。

アレフー 風 一翼の生えた黄金色の頭部、長くたなびく金髪。

ギメルー 月 一青みを帯びた三日月の冠、顔は真摯な表情の美女。青みを帯びた光輪。

ヨッドー 処女宮 一草色の長衣をまとった乙女の胴体。

アレフー 風 一大型の黄金の翼、一部分下半身を覆う。

ラメドー 天秤宮 一手足は均衡よく発達している。

手ないし足元に、明るい緑色の剣と正義の天秤がある。

上記の姿形の周囲に、文字の綜合色である緑がかった光が放散している。タローの「鍵」が姿形の形成に役立つ。

また、天的存在に限らずすべてのテレズマ的姿形は可能な限り、純粋な美しい姿に形成するよう心がける必要がある。テレズマ的姿形が、不純な低俗な姿になれば、術者に対する危険も増大する。

一般に姿形の胸部にシギルを描き、帯に名前を描く。ラビ・シモン・ベン・ラキシユは、古代の表象において天使の名前を胸部のタブレットに置く理由を説明する際に、名前の語尾がエルとなる天使を例にとり、聖書の「主なる神がそこに住まわれるためである」(『詩篇』68. 18)の記述を根拠としている。<sup>(18)</sup>

そして、天的存在の姿形を雲に乗せる。つまり、背景に雲上世界を配置する。

天的存在の荘厳さを保ち、象徴体系を厳守し、天的存在の象徴におけるいかなる示唆も、粗野な或いは俗化された要素も忌避して、その姿形を形成したなら、姿形が語りかける声を聞きとる。

セラフィム天使団の姿形は、周囲に炎を踊らせる女戦士となり、その容貌は太陽の如く輝き、その足元には荒れ狂う海と雷雲がある。彼女の周囲には電光と炎の如き輝きがある。三角状の兜をかぶるか、△のような炎の頭飾をつけている。

天使グラフィエルの姿形は、最高の栄光に包まれた女戦士であり、光を放つ三日月を戴き、四枚の翼をもち、周囲には炎と電光を踊らせている。

一般的に天的存在の名前には類型がある。若干の例外を除いて、どれも  $\aleph$  エル、または、 $\beth$  ヤーで終わる。神聖なる名前エルはケセドに属し、善にして強力かつ大いなる力を表すが、ヤーの名前に比較すると、やや控え目な作用を有している。天使のみならず、悪魔すら神聖なる潤沢なエネルギーから力を引き出すことができる。そのため、悪霊の名前にもエルが加えられる場合がある。一方、ヤーは善かつ利他的職分のみを果たす天使あるいは霊に加えられる接尾語である。

これら二種の接尾語は、本質的差異を有さず、むしろ偶然的配属にすぎない。これを理解しておけば、テレズマ的姿形の構築に際して、過度の注意を払う必要がないことが分かる。

黄金の夜明け団の見解によれば、天的存在の語尾のテレズマ的姿形の解釈は次のとおり。

天的存在の名前の語尾に  $\aleph$  エルをつけると、常に天存在的姿に翼と正義の象徴を与える。

天存在的存在の名前の語尾に  $\beth$  ヤーをつけると、天存在的姿は王や王妃のように玉座につき、

---

(18) *Jewish Encyclopedia Volume I*, New York : Funke and Wagnalls, 1901, p.593.

足元に炎の栄光を有することになる。<sup>(19)</sup>

これらの姿形の構築に際しては、あなたの目の前にアストラル的なイメージとして想像してもよいし、事前に絵を描いてイメージを定着させても良い。しかし、テレズマ的姿形と照応する神聖なる名前を発音する際には注意を払う必要がある。

前述したように宇宙の4階構造のなかで、神名はアツィルト界に、大天使名はブリアー界に、天使名はイエツィラー界に割当てられる。また、テレズマ的姿形が帰属するセフィロトの名前を補足的に用いる場合もある。

テレズマ的姿形はアツィルト界にはほとんど応用できない。ブリアー界においても、定められた僅少な範囲で応用できるのみである。つまり、ブリアー界に属するテレズマ的姿形は、頭を隠したうつろな影の如き姿を呈する。

つまり、テレズマ的姿形は、事実上イエツィラー界に属する。従って、 $\aleph\iota\aleph$  や  $\aleph\aleph\aleph$  のようにアツィルト界に属する神聖名から構築したテレズマ的姿形を用いるのは不可能である。その姿形はアツィルト界に表現されることなく、イエツィラー界において副次的に表現されるにとどまる。一方、アッシャー界では、元素霊の姿形を表現できる。

テレズマ的姿形の性別は、文字全体のなかで男性的文字が強いのか、女性的文字が強いかで決まる。しかし同じ姿形のなかで性を乱立させることは避ける必要がある。構築された姿形は文字の数と同じだけ細分化される。頭から始めて下に至るのである。この性別決定法に加えて、ある種の名前は構成文字に関係無く本来的性別を有している。また両性的な名前もある。

天使的存在の性別については、単純な解釈は成立しないので注意を要する。神聖なる光の放射力である天使的姿形は、卑俗な意味での性別を有していないが、男性的側面と女性的側面とによって分類できる。

物質的次元を離れるほど、性別は次第に特徴を失い、別の局面により補完されるようになる。男性、女性の区別は保たれているが、意味が変容するのである。性の物質的かつ粗雑な側面をそのまま、天使的存在を語ることはできない。

通常の意味に於ける性別は、元素霊、ケルビムの形態、妖精、惑星霊、オリポス霊に属する。また、クリフォトも最大限に誇張された獣的局面における性別を有する。クリフォトの墮落の度合に比例して、その獣性は増大する。また、ある種の邪悪な元素霊においても、性別が誇張され、卑俗なものとなっている。



ルーブル美術館の女性形の天使

(19) 一般的な解釈としてはトラフテンベルグの『ユダヤ魔術と迷信』の別紙第1「魔術的名前の形成」を参照されたい (Joshua Trachtenberg, *Jewish Magic and Superstition*, Philadelphia : University of Pennsylvania Press, 2003, pp.260-264.)。コーヘン兄弟は『左方流出論』のなかで上位3セフィロトから流出する天使存在をサビエル、ペリエル、イエリエルとし語尾エルを「大いなる意志の顕現」で、「因の因であり、理の理である」と解釈し、下位7セフィロトから流出するメメリロンからセフォリロンの語尾ロンをもつものをエルより劣位の灯火であるとしている。しかし、上記は左側への流出という特殊なアスペクトを取扱った論述であり、より普遍的な説を採用する (Rabbi Isaac Ben Jacob Ha-Kohen, *Treatise on the Left Emanation*, Edited by J.Dan and R.C.Kiener, in *The Early Kabbalah*, New York : Paulist Press, 1986, p.167.)。

しかし、高次の天使的存在においては、性別は姿形と相関している。岩や柱の如き堅牢さは女性的である。落ち着きのなさや運動は男性的である。ゆえに、天使的な形態や姿に性別を振り分ける場合、これを明確に理解すべきである。伝統は、あらゆる諸力を猛烈な奔流する力と確固たる安定した力の二種に分類する。ゆえに前者を表す姿は男性であり、後者のそれは女性的である。



聖パウロ寺院の男性形の天使

しかし、通常の隠秘学的名前や言葉からテレズマ的姿形を形成する際の便宜として、ヘブル文字を男性的、女性的の両者に分類することができる。この分類は文字自体に男性女性があることを確証するものではなく、前出の力の区別に照らしてその傾向があることを示すのみである。

各文字にはセフィラと同様に男性的と女性的の二重性が隠されている。作用の迅速な諸力に割り当てられる文字は、女性的というよりは男性的である。より確固で安定した力を表す文字は、男性的というよりは女性的である。そのため、前に向かうように長発音する文字は、女性的というよりは男性的である。ある種の文字は両性であるが、どちらかの性に傾いている。

ヘブル語アレフベートに対応する象徴と性別決定の要素を次に述べる。

#### ヘブル文字のテレズマ的帰属

ヘブル文字	テ レ ス マ 的 帰 属
アレフ (A)	靈的。一般的に有翼、両性具有、より女性的、細め。
ベト (B)	活動的で痩せ型。男性的。
ギメル (G)	灰色、移ろい易い美しさ。女性的、丸い顔や身体。
ダレス (D)	非常に美しく魅惑的。女性的。より円みを帯びた顔体。
ヘー (H)	激しく、力強く、火のような。女性的。
ヴァウ (V)	確固として力強く。より、重く、鈍重。男性的。
ザイン (Z)	細く、知性的。男性的。
ケト (Ch)	円みを帯びた顔。あまり印象強くない。女性的。
テト (T)	力強く火のような。男性的。
ヨド (I)	極めて白く、非常にデリケートな。女性的。
カフ (K)	大きく力強い。男性的。
ラメド (L)	良く均衡の取れた。女性的。
メム (M)	思慮深く、夢のような、両性具有の。より女性的。
ナン (N)	角張った顔、男性的、暗い。
サメク (S)	細く、印象的な顔。男性的。
アイン (O)	機械的な。男性的。
ペー (P)	激しく、力強く、決然とした。女性的。
ツァダイ (Tz)	思慮深く、知性的。女性的。
コフ (Q)	円みを帯びた顔。男性的。
レシュ (R)	誇り高く、支配的。男性的。
シン (Sh)	激しく、活動的、両性具有。より男性的。
タウ (Th)	暗く、灰色、両性具有。より男性的。

一方、ヘブル文字が固有にもつ象徴的意味は、以下のとおりである。

### ヘブル文字の象徴

ヘブル文字	文字原義／占星術的照応／タロー／秘密の称号
アレフ (A)	牡牛／風／愚者／エーテルの霊
ベト (B)	家／水星／魔術師／力の魔術師
ギメル (G)	駱駝／月／高等女司祭／銀の星の女司祭
ダレス (D)	扉／金星／女帝／無敵の一者の娘
ヘー (H)	窓／白羊宮／皇帝／朝の息子、無敵なる者たちの長
ヴァウ (V)	鉤／金牛宮／高等司祭／永遠の神々の魔術師
ザイン (Z)	剣／双児宮／恋人たち／聖なる声の子ら、無敵の神々の託宣
ケト (Ch)	囲い／巨蟹宮／戦車／水の力の子、光の凱旋の君主
テト (T)	蛇／獅子宮／剛毅／燃える剣の娘、獅子の指導者
ヨド (I)	手／処女宮／賢者／光の声の魔術師、神々の予言者
カフ (K)	拳／木星／運命の輪／生命の力の君主
ラメド (L)	山羊／天秤宮／正義／真実の君主の娘、均衡の保持者
メム (M)	水／水／吊人／無敵の水の霊
ナン (N)	魚／天蠍宮／死／偉大なる変容者の子、死の門の君主
サメク (S)	支柱／人馬宮／節制／和解者の娘、生命の力のもたらし手
アイン (O)	目／磨羯宮／悪魔／物質の門の君主、時間の諸力の子
ペー (P)	口／火星／塔／無敵の軍勢の君主
ツァダイ (Tz)	釣針／宝瓶宮／星／天空の娘、水の間に住むもの
コフ (Q)	耳／双魚宮／月／潮の干満の支配者、無敵の息子の子
レシュ (R)	頭／太陽／太陽／世界の火の君主
シン (Sh)	歯／火／審判／源初の火の霊
タウ (Th)	十字／土星／宇宙／時間の夜の偉大なる者

そして、色彩面での保証を与えるのが、次の色階表である。

## 色階表

番号	王の色階 (アツィルト)	女王の色階 (ブリアー)	皇帝ないし王子 (イエツィラー)	女帝ないし小姓 (アッシャー)
1	輝光	白輝光	白輝光	金斑入白
2	柔らかい青	灰色	真珠貝の青	赤青黄斑入白
3	深紅	黒	濃茶色	ピンク斑入灰色
4	深堇	青	深紫	黄斑入深空色
5	オレンジ	緋赤	輝く緋色	黒斑入赤
6	ピンクローズ	黄色 (黄金)	サーモンピンク	金琥珀色
7	琥珀色	エメラルド色	明るい黄緑	白斑入オリーブ
8	堇色	オレンジ	赤小豆色	白斑入黄茶
9	藍色	堇色	とても暗い紫	空色斑入レモン
10	黄色	レモン、オリーブ、小豆、黒	金斑入の4色	黄色縞入黒
11	明るい薄黄色	空の青	青いエメラルドグリーン	金斑入エメラルド
12	黄色	紫	灰色	堇色斑入藍色
13	青	銀色	冷たい薄青	空色縞入の銀
14	エメラルドグリーン	空色	初春の緑	薄緑縞入の薔薇色
15	緋色	赤	輝く炎色	輝く赤
16	レッド・オレンジ	深い藍色	深く暖かいオリーブ	濃茶
17	オレンジ	薄いモーヴ	新しい革の黄色	モーヴ気味の赤灰色
18	琥珀色	マルーン	明るい濃い小豆色	暗緑茶
19	緑がかった黄色	深紫	灰色	赤琥珀色
20	黄色がかった緑	青灰色	緑灰色	青みがかった紫
21	堇色	青	濃い紫	黄縞入の明るい青
22	エメラルド・グリーン	青	深青緑	薄緑
23	深青	海の緑	深いオリーブグリーン	真珠貝の紫斑入白
24	緑青	鈍い茶色	とても暗い茶色	ゴキブリの藍茶色
25	青	黄色	緑	暗く鮮やかな青
26	藍色	黒	青黒	黒に近い冷灰色
27	緋色	赤	ヴェネチアン・レッド	空色或はエメラルド縞入の明るい赤
28	堇色	空色	青みがかったモーヴ	紫気味の白
29	深紅	銀白色斑入の鈍黄色	明るい半透明ピンクがかった茶色	石の色
30	オレンジ	黄金の黄色	濃い琥珀色	赤縞入の琥珀色
31	輝く緋色オレンジ	ヴァーミリオン	黄金斑入緋色	濃紅とエメラルド縞入のヴァーミリオン
32	藍色	黒	青黒	青縞入の黒
31	レモン、オリーブ、小豆、黒	琥珀色	暗い茶色	黄色と黒
32	灰色に移行する白	深紫 (殆ど黒)	プリズムの七色、紫は外側	白、赤、黄色、青黒 (外側)
ダース	ラヴェンダー	灰白	純粋堇色	金斑入の黄金

この色象徴は実践的目的に使用する。色階はそれぞれの位相のものを用いるので、テレズマ的イメージの構築にあたっては、大天使は「女王の色階」を、天使は「王子の色階」を使用する。現代魔術においては《黄金の夜明け》団の照応表が基準になっている。その他の照応表もあるが、常識的には普及しているこの表を使用するのが賢明であろう。当然、I ∴ O ∴ S ∴ もそれを使用している。

### (3) テレズマ的姿形の第2原理 (イメージの活性化)

テレズマ的姿形の第2原理は「神聖名発音の振動様式」である。

テレズマ的姿形の原点である神聖なる名前を振動させる際に重要なことがある。それは可能なかぎりケテルの神聖なる白輝光の観念に向かって上昇することだ。つまり、心を至高の熱望の次元まで高揚させ、振動を行う。これを行わない場合は、アストラル的諸力のみに働きかけることとなり、術者に危険を招来する。魔術における振動はある種の力を術者に引き寄せるが、その場合、術者の精神状態に相応した諸力が招来されるからだ。

通常の振動様式は次のように実施する。

意識をケテルに上昇させ、白輝光を心臓まで下降させる。

次に十分に息を吸い込み、意識を心臓すなわちティファレットに集中させる。

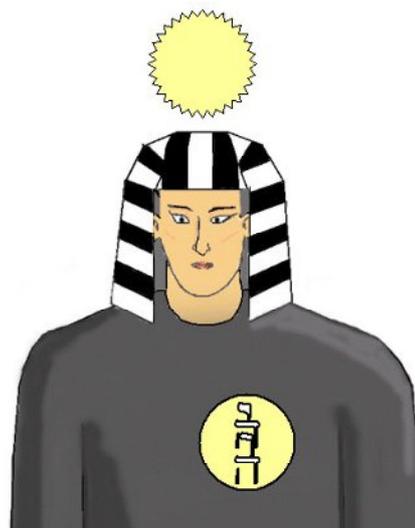
それから名前の文字を心臓内に白文字で公式化し、ちゃんと記されたことを実感する。

白輝光で文字を公式化することが大事である。アパス・タットワのような、くすんだ白色ではいけない。それから息を吐きつつ、ゆっくりと文字を発音する。音響が自分のなかで振動するように発音する。吐き出した息が自分を膨張させ、宇宙を満たすさまを想像する。宇宙全体を振動させているかのように名前を発音する。名前は宇宙の果てに到達するまで振動するのをやめないこと。

実効のある実践魔術作業は、術者を疲労させ、生体磁気を抜いてしまう。

ゆえに、重要なことをやろうと望むのであれば、完全なる生体磁気状態と神経状態で臨むべし。さもないと、善のかわりに悪をなしてしまう。

名前を用いるとき、また薔薇十字の薔薇から印形を引き出すときは、薔薇十字が帰属するセフィラがティファレットであることを思い出す必要がある。ティファレットの位置は心臓にあたり、いわばそこに薔薇が咲いている。名前のテレズマ的姿形の公式化は、つねに必要というわけではない。一般原則として、名前は構成文字の数だけ発音する。つまり、五文字ならば五回唱える。



### (4) テレズマ的姿形の応用例

「生命の木」の光の中枢を結びつける22個の小径には、次の象徴が色濃く照応している。

即ち、ヘブル語の22文字、占星術の三大、七惑星及び獣帯の22のサイン、そしてタローの大アルカナの22枚という三種類のイメージである。

この四つの象徴は相互に交換することができる。魔術教団BOTAを興したポール・フォスター・ケースは、ヘブル語の綴りをタロットに置換して、新たな象徴群を築いた。生命の木の小径に占星術の象徴を当てて、パス・ワーキングを行うのは古くから行われていたことである。

従って、ヘブル語で記された名前を、何種類かの表現で解説することができる。即ち、占星術的イメージ(神話と象徴)、タローの図象及び『Tの書』の称号、イエツィラー文による小径の知性、エジプト神、タットワなどである。その他、出处不明であるが《黄金の夜明け》団が用いた22文字の性別解釈がある。

このように、名前の1文字1文字が、多彩なイメージを持つ。そして、文字どおり名は体を

表す。我々はこのヘブル語の名前から、能動的想像力を用いて天使の姿を構成できるのである。  
 イスラエル・リガルディーの『黄金の夜明け魔術全書』第4巻に、大天使サンダルフォンの  
 テレズマ的イメージ構築法が例示されている。

サンダルフォンのヘブル語表記は、次の文字式で表される。

サメク (S) + ナン (N) + ダレス (D) + ラメド (L) + ペー (P) + ヴァウ (V)  
 + ナン (N) = SNDLPVN

この一文字、一文字に、イメージが照応する。

まず、性別については、

S (男性) N (男性) D (女性) L (女性) P (女性) V (男性) N (男性) となり、合計  
 すると 男性×4、女性×3で、男性が支配的であり、計算上は男性になる。

しかし、サンダルフォンはブリアー界に属する大天使名であり、イェツィラー界の単なる天  
 使名とは異なる。サンダルフォンは、ヘブル語でイェツェルすなわち「左」と呼ばれる別名を  
 もち、この場合の文字は、女性、女性、男性となる。従って、男性でも女性でも良いという解  
 釈さえなりたつが、総合的な判定は女性となる。

さて、ここで身体の細部に移るのだが、どこが頭でどこが手足かと言うと、文字を縦に起こ  
 し、先頭の字を頭、そして最後の字を足に見立てるのがルールだ。それでは、サンダルフォン  
 は、次のとおり。

ו	頭	◇美しく細目の活動的な面立ち	◇激しい	◇青
נ	首	◇見事なほど完全な	◇鷲の翼が背中から生える	◇青・緑
ד	肩	◇美しい女性の	◇美しいが撫で肩	◇緑・青
ל	胸	◇完璧な姿形の	◇女性の胸	◇エメラルド
פ	腰	◇力強く完全な	◇力強く毛深い尻と腿	◇赤
ו	脚	◇重厚な	◇雄牛のような	◇赤・オレンジ
נ	足	◇筋ばった、たぶん翼のある	◇鷲の足	◇緑・青

という一連のイメージで形を与えられ、その足は大地を踏み、頭部は天の雲の中に隠れてい  
 る。この描写の色は（一部違うところもあるが）王子の色階を用いている。描写されない部分  
 は青色で、人馬宮に属する顔の雰囲気は馬に類似する。全体的な印象はエジプト女神のアト  
 ールかネイスに似て、弓と矢を携帯する。

これらは荒削りな素材であって、それを総合する必要がある。例えば、ブリアー界に顕現す  
 るサンダルフォンは女王の色階で描写されねばならず。伝承による修正、団の伝統的イメージ  
 の付加などで、このサンダルフォンを処理すると、些か『黄金の夜明け』とは違ってくる。

サンダルフォンに関する I :: O :: S :: の解釈は、次のとおりである。

「黄金の髪を持つ細面の深い憂愁を湛えた瞳が印象的な男性的な面立ち、高い焦げ茶色の襟に  
 隠された首筋は円みを帯び、空の青に似た深いケープを纏い肉感的な肩の後ろには2対の巨  
 大な羽根が開いている。膨らんだ胸を覆う成型した青草の鎧は男女の区別を伺わせず見事な  
 生体的曲線を描いている。腰回りは力強く、その赤帯は鉄の鋌を打った頑丈な代物で、藍色  
 の上懸けをした鎖鎧に覆われた左腿に沿い見事な技物の長剣が下がっている。大地を踏みし  
 めた頑丈な革の靴は黒に近い茶色である」

以上が、ブリアー界に戦装束で現れたサンダルフォンだ。むろん、他の世界では別の顕現を

するので注意しなければならない。原則として、大天使には女王の色階を、天使には王子の色階を充当するが、それも各々の世界に存在するときの話である。

イメージ構成上の注意を述べよう。

あたかもプラモデルを組み立てるように、形や色の指定を行ったが、テレズマ的イメージというのは、魔術師が天使を同じ視座で見るための約束事である。これは「黄金の夜明」魔術を学ぶ者の間にしか通用しない。大天使や天使の本質は、レベルの違う力と形の動態であり、一枚の絵のように描写できる安易な存在ではない。

そこで、構築したイメージの背後には常に変化する霊的存在があることを忘れないように。畏敬の念を失うことのないように。間違っても大天使を支配し、創造するという傲慢に陥ることのないように注意喚起しておく。

技術的な側面に移ると、文字数による人体（霊体の視覚的イメージ）の構成は次のとおりである。しかし、これに固執する必要はない。

- 3文字 頭～胴～脚
- 4文字 頭～首～胴～脚
- 5文字 頭～首～腕～胴～脚
- 6文字 頭～首～腕～胸～脚～足
- 7文字 頭～首～腕～胸～腰～脚～足
- 8文字 頭～首～腕～手～胸～腰～脚～足

天使像に重ねると下記のとおり。

8文字	7文字	6文字	5文字	4文字	3文字
頭	頭	頭	頭	頭	頭
首	首	首	首	首	
腕	腕	腕	腕		
手	胸	胴	胴	胴	胴
胸	腰				
腰	脚	脚	脚	脚	脚
脚	足	足			
足					



## 4 四大照応の大天使の座

### (1) 四大天使

次に小五芒星儀礼などで頻繁に接触する「四大の大天使」について述べる。

黄金の夜明け団が整理した象徴大系においては、四柱の大天使はラファエル、ミカエル、ガブリエル及びウリエル（アウリエル、ソウリエル）である。

どの天使を四大天使と数えるかについては異説がある。しかし、ギリシャ魔術パピルス文書群のなかで、著名なミモー・パピルス（ルーブル・パピルス2396）においては、ラー・ヘリオス・アポロンを召喚する際に、この四柱が神として語られる。

「・・・われは父祖アダムなり、わが名はアダムなり・・・神IAOの御名により、神ABAOTHの御名により、神ADONAIの御名により、神ミカエルの御名により、神ソウリエルの御名により、神ガブリエルの御名により、神ラファエルの御名により、われ汝を召喚す。」<sup>(20)</sup>

ほぼ同時代と言える『第1エノク書』又は『エチオピア語エノク書』のとある版においても、ミカエル、ウリエル、ラファエル及びガブリエルを数えている。<sup>(21)</sup>

また、『ミドラシュ・コーネン』には、「ミカエルは右手に、ウリエルは左手に、ガブリエルは中央に、ラファエルは御座の後ろに・・・」と表現されている。<sup>(22)</sup>

フォン・ジェンセンはこの四天使が大地の四方位を支配すると言う。<sup>(23)</sup>そして、四方位の象徴は四方位の風である。ヘブル語では、風＝息吹＝霊、を表す単語はルアクである。

「主の息吹（ルアク・ヤーウエ）、叡智と理解の息吹（ルアク・ホクマー・ヴェ・ビナー）、深慮と力の息吹（ルアク・エツァー・ヴェ・ゲブラー）、主の知識と畏れの息吹（ルアク・ダース・ヴェ・イリアット・ヤーウエ）」（『イザヤ書』11章2）

ゲルション・ウィンクラーは、上記の配列を伝統的なユダヤの祈禱文と関連づけて、以下のごとく整理した。<sup>(24)</sup>

主の息吹	→ 北	→ ウリエル
叡智と理解の息吹	→ 西	→ ラファエル
深慮と力の息吹	→ 東	→ ガブリエル
主の知識と畏れの息吹	→ 南	→ ミカエル

この原型となったユダヤ教の夜禱の一節は、次のとおり。<sup>(25)</sup>

---

(20) PGMIII145-150, Edited by Hans Dieter Betz, *The Greek Magical Papyri in Translation, Volume One*, Chicago : The University of Chicago Press, 1986, p.22.

(21) R.H.Charles, *Ethiopic Version of the Book of Enoch in Anecdota Oxoniensia*, Oxford : Oxford University Press, 1906. E. Isaac, "1 (Ethiopic Apocalypse of) ENOCH", in *The Old Testament Pseudepigrapha*, Vol.1, New York : Doubleday, pp.11, 16.

(22) *Jewish Encyclopedia* Volume 1, New York : Funke and Wagnalls, 1901, p.593.

(23) P.Jensen, *Die Kosmologie der Babylonier*, Berlin : Walter de Gruyter, 1974, p.163.

(24) Gershon Winkler, *Magic of the Ordinary : Recovering the Shamanic in Judaism*, Berkeley : North Atlantic Books, 2003, p.43.

(25) *Sephath Emeth (Speech of Truth)*, New York : Hebrew Publishing Company, n.d., p.111.

BShM I I ALHI IShRAL  
ベシム イヨー エロヘイ イスラエル  
イスラエルの神の御名において、

MIMINI MKAL VMS hMALI GBRIAL  
ミミニ ミカエル ヴェ・ミシエマリ ガブリエル  
我が右手（めて）にミカエル、我が左手（ゆんで）にガブリエル、

VMLPNI AVRIAL VMACHVRI R PAL  
ヴェ・ミレポナー アウリエル ヴェ・メアコーレー ラファエル  
我が前にアウリエル、我が後ろにラファエル、

VOL RAS h I ShKINT h AL  
ヴェアル ラシー シェキナス エル  
頭上に神の臨在あれかし。

この祈祷文と小五芒星儀式との関連を最初に指摘したのは市井のカバラ研究家ビル・ヘイドリック（『ユダヤ教夜禱における小五芒星儀式の起源』1977年。）であった。<sup>(26)</sup>

しかし、どの大天使が四方位の各方角を支配するかは異説がある。ゲルション・ウィンクラーは、上記の祈祷文とともにラファエルが西、ミカエルが南、ガブリエルが東、アウリエルが北に位置すると説明した。祈祷文の立ち位置からすると矛盾するが伝統的な解釈を示したのである。<sup>(27)</sup> ヘルメス学の配置とは異なるが、似て非なる伝統間において正誤判定は無意味だ。

従って、以後は黄金の夜明け団の説を採用していく。

活動界の四方位を占めるラファエル、ミカエル、ガブリエル、アウリエルの4人の大天使は、本来の座であるブリアー界から離れて活動している。当然、そのテレズマ的イメージも上位の界にいるときとは違いマルクトの影響を色濃く受けている。

より正確に述べるならば、ブリアー界のラファエルはティファレットの大天使ラファエル・ティファレテルであるが、風の天使としてアッシュァー界に顕現するときはラファエル・ルアキエル又はセフィラ・ホドの強い影響を受けたラファエル・ホダリエルであり、その象徴大系は微妙に異なる。<sup>(28)</sup>

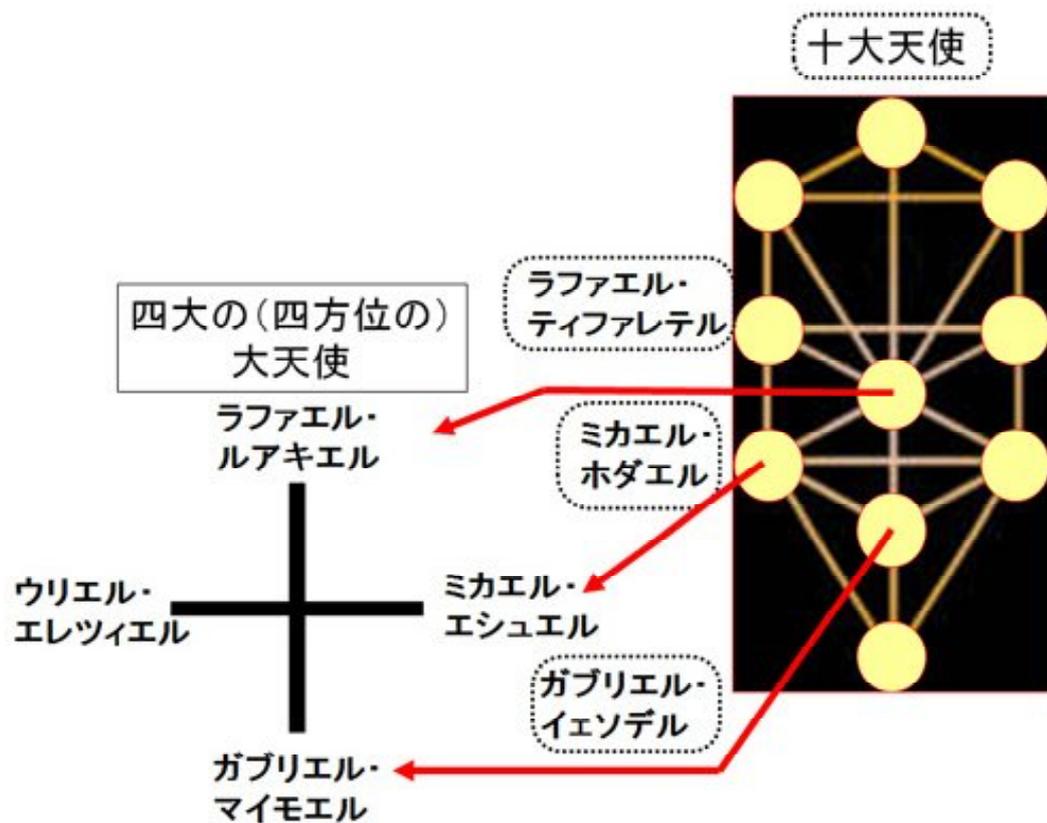
従って、実効的にはセフィロトへの大天使の帰属を論じる場合と、四方位の帰属を見る場合では別の大天使と対峙しているのだと考えても差し支えない。

---

(26) Israel Regardie, Edited and Annotated by New Material by Chic Cicero & Sandra Tabatha, *The Middle Pillar*, St. Paul : Llewellyn publications, 2000, p.183, p.205n.

(27) Gershon Winkler, *Magic of the Ordinary*, Berkley : North Atlantic Book, 2003, pp.43, 54.

(28) Chic Cicero & Sandra Tabatha Cicero, *Self-Initiation into the Golden Dawn Tradition*, St. Paul : Llewellyn Publications, 1995, p.159, n.46.



大天使は基本的には無性であるが、「風」と「水」の大天使は女性的、「火」と「地」の大天使は男性的外観に視覚化する。<sup>(29)</sup> 羽根は巨大な一枚翼を左右に一对持ち、その半透明な翼は純白の幾万幾億もの霊質の羽毛が織りなすものである。額からは後光と称される強烈な光輪が咲き、大天使の表情を半分覆い隠している。

	基本色	武器	印	象
風	黄色	短剣	若々しい細身で、エルフのように尖った耳と細面の頬を持つ。	
火	赤色	杖	力強く、逞しい肉体。輪郭の明瞭ながっしりした顔の造作。	
水	青色	盃	豊かな円熟した雰囲気。やや丸みを帯びた顔付き。	
地	緑色、または 緑、レモン、 小豆、黒の四色	円盤	老成した筋肉質の肉体。雄牛のような堅固な表情。	

(29) ヘブル語アレフベートのテレズマ的記述によれば、四大天使の性的外観はすべて女性的になる。天使の末尾語エル(A L)は、女性的な属性をもつからだ。これは四大属性をもつルアキエル等を加えるとさらに顕著となる。しかし、天使の外観を決定する要素のなかで伝統的イメージを重視すると異なった結果を導き出せる。ここで示したジェンダーは、I ∴ O ∴ S ∴ の儀式的な構成を考慮したものである。

## (2) ラファエル

### a 伝統的イメージ

ラファエル (רפאל) は、「神 (אל) の癒し (פא) 」という意味である。

ラファエルなる天使名は正典には出てこないが、聖書外典では人気のある天使である。

とあるユダヤの伝承によれば、ラファエルは本来ラビエル (רביאל) (「神 (אל) の大いなる (ר) 者」という天使であったが、人類創造の際にラファエルと改名したとされる。<sup>(30)</sup>

ラファエルは、ミカエル及びガブリエルとともにアブラハムを訪問した三人の天使 (創世記18:2) の一人とされる。また、ラファエルは大地と人間を癒す者である。エノク第1書の40章においては、ラファエルは人間の子供のあらゆる病気や怪我を治す4人の天使のひとりとされている。<sup>(31)</sup> 『天使ラジエルの書』の著者ともされる。<sup>(32)</sup>

後代の伝承のなかには、ソロモン王が神殿を建てるため神に助けを請うたとき、天使ラファエルは有名な魔術の指輪をソロモン王にもたらしたとある。

### b ラファエル・ルアキエルのテレズマ的姿形

黄色の胴着をまとい、両肩から太腿まで青灰色の薄地の帯を垂らし、端末は右回りに巻きつけている。胴着は赤い腰帯で結び、素足で空中に立つ。両手は逆Vの字を描くように垂らし、右に風の短剣を握っている。ライト・ブロンドの髪とゆったり広げた両の翼は風をはらんで動いている。薄い灰色の瞳は透明な光の点の中でぽつりと輝いている。

ラファエルは、宏大な草原を揺り動かす風の中に現れる。白い雲が幾筋もたなびく中、補色の藤色のオーラを従えて空から降臨する。ラファエルの方角から吹いてくるそよ風と、微かな天使の歌声が耳を震わすのを感じなさい。



רפאל רוחיאל

(30) 本来の典拠は、アドルフ・ジェネリク編『ペイト・ハ・ミドラシュ』所載の『ミドラシュ・コーネン』にあるが、残念ながら入手できていない (Edited by Adolf Jellinek, *Midrash konen, Beit ha-Midrash, Volume 2, Leipzig : Fridrikh Nies, 1853, p.27.*). 上記による記述が、ギンズパークの著作にある (Louis Ginzberg, *The Legends of the Jews, Volume 1, Philadelphia : The Jewish Publication Society of America, 1954, pp.52-54.*).

(31) 1 ENOCH, *The Old Testament Pseudepigrapha Volume 1, New York : DOUBLEDAY, 1983, p.32.*

(32) Edited by Steve Savedow, *Sepher Rezial Hemelach : The Book of the Angel Rezial, York Beach : Samuel Weiser, 2000, ix.*

### (3) ミカエル

#### a 伝統的イメージ

ミカエル (מִיכָאֵל) の名前は、「神 (אֱלֹהִים) のごとき (הַגִּבּוֹרִים) 者」という意味である。ユダヤのタルムード研究家は、『出エジプト記』(15:11) にある「誰があなたのように הַגִּבּוֹרִים מִי 聖にして栄えあるもの」と、『申命記』(33:26) の「神に並ぶ者はない מִי כְּאֵל」との二つの文章のうち前者の「י」と後者の「אֱלֹהִים」を結びつけた名前がミカエルであると解釈してきた。

ラビ・シモン・ベン・ラキシユによれば、ミカエルはカルデア起源の天使である。

そして、客観的に見てもキリスト教、ユダヤ教及びイスラム教において、あらゆる天使たちのなかで最も偉大な者とされてきた。

『エノク書』においては、「イスラエルの宰相」 מְרַם שֶׁל יִשְׂרָאֵל と呼ばれ、主の霊に付き従う第1の声である。

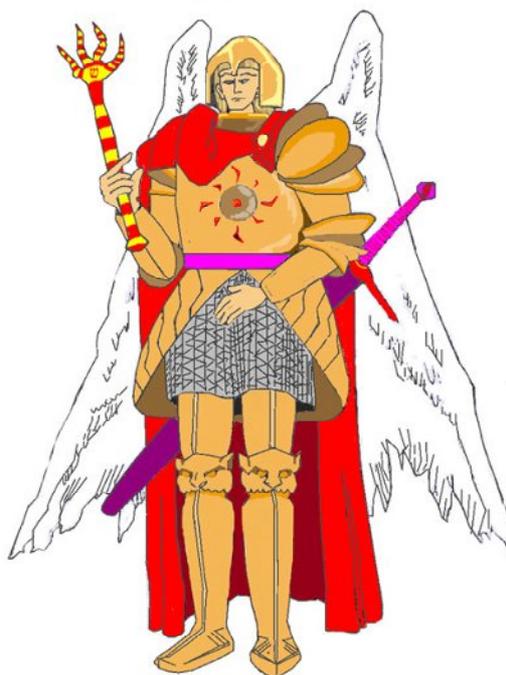
『ダニエルの書』(12:1) においては、「汝が民の子らのために立つ大いなる宰相」 מְרַם דָּנִיֵּאל וְכָל בְּנֵי בְּנֵי יִשְׂרָאֵל と呼ばれる。

伝統的に戦士の姿で現れ、墮天使を制圧する構図で描かれることが多い。

#### b ミカエル・エシエルのテレズマ的姿形

青銅色の鎧をまとい背中には赤の陣羽織を垂らし、右手に火の杖を持ち、左手は腰に吊した大剣の近くに添えている。鎧は全身を覆う本格的な装甲であり、胸甲には黄金色の太陽の紋章が描かれ、膝当は意匠化した獅子の顔である。赤の陣羽織は左肩にエメラルドの止飾りで固定され、ローマ時代の戦士が被ったような顔面装甲の無い桃型兜の下から、良く日に焼けた健康そうな顔と金髪が覗いている。太い獅子眉の下には鳶色の瞳が輝く。

ミカエルは、真紅色の巨大な太陽の中から現れる。かれの背後には補色の緑色のオーラが輝き、右手の杖から真夏の太陽の熱気が放射されている。心臓が熱く脈打ち、貴方の内部にミカエルの方角から来る靈感の熱が燃える様子を感じとりなさい。



מִיכָאֵל אֱשִׁי אֵל

## (4) ガブリエル

### a 伝統的イメージ

ガブリエル (גַּבְרִיֵּאל) の名前は、「神 (אל) の人 (גַּבְרִיֵּאל)」という意味である。

ヘブル語 גַּבְרִיֵּאל は、「強き者」、「英雄」という意味もあり、そのように解釈する説もあるが、ここでは『ユダヤ百科事典』とゲセニウス博士の『ヘブル・カルデア語辞書』の解釈を取る。

ガブリエルはペヌエルでヤコブと戦った天使とされる。その情景を描いたレンブラントの画布が有名である。ガブリエルは「火の宰相」たるミカエルに対して「水の宰相」とされる(火の宰相とする説もある)。また、果実の実りの宰相とも言われる。

ユダヤの伝承によれば、ガブリエルは赤子のアブラム(後のアブラハム)が置き去りにされた洞窟に現れ、その親指から流れる乳と蜜でアブラムを育てた。洞窟に置き去りにされてから3日目にアブラムは、アダムが天使ラジエルから与えられ、ノアが泥酔したあげく海に落としたとされる伝説の宝石を与える。アブラハムからイサク、ヤコブと石は伝承されヤコブはこの石を持っているときに有名なヤコブの梯子を見る。ヤコブの息子ヨセフは兄弟の計略にかかって穴に投げ込まれたとき石を手にしており、暗い穴のなかで石が輝くと光輝く天使ガブリエルの宮殿に移行しており、穴のなかから解放される3日目の晩までガブリエルの宮殿に滞在した。このガブリエルの宮殿は、ドイツの口承伝承としてラビ・メイヤーが再訪したとされ、ガブリエルの宮殿にはモーセ自らが写書した13巻の律法の書があり、12部族用に一巻ずつ、最後の第13巻は天上の学舎のために記されたと天使ガブリエルの説明を受ける。ラビ・メイヤーが筆写した天上の知識を納めた最後の律法の書は水密の容器に格納されヴォルムスのユダヤ人居住区に流れ着いたとされる。<sup>(33)</sup>

ガブリエルは上記のように人間を見守るとともに、イスラムの伝統によればソドムとゴモラを滅ぼしたのはガブリエルの翼である。アンリ・コルバンは、人間を教導する天使として漆黒の闇の翼と純白の光の翼を併せ持つガブリエルの伝承を紹介している。<sup>(34)</sup>

### b ガブリエル・マイモエルのテレズマ的姿形

白い鎧を身にまとい両手を胸の前で組んで水の盃を保持している。青の陣羽織は両襟がチューリップ状に膨らみ耳まで覆っている。その陣羽織は銀の飾りボタンで留めた喉から別れて、両肩と左右の前腕部を被って、地面まで達しており、開いた前の部分から足を揃えて直立した鎧姿の大天使の腰に長剣の代りに大きな角笛が下げているのが見える。翼は逆三角形の形に畳んであり、無帽の頭には栗色の長髪が中分けされて背中に垂れている。静かな面立ちの瞳は緑。

ガブリエルは、湖または海の中から浮き上がる。白い波の連なる水面を背景に、補色のオレンジ色のオーラが取り巻く。輝く水は知性を洗い清め、鉄を焼き戻すように貴方の心を鍛える。



גַּבְרִיֵּאל מִיְמוֹאֵל

(33) Howard Schwartz, *Gabriel's Palace*, Oxford : Oxford University Press, 1993, pp.121-123.

(34) LTCOL H. Wilberforce Clarke, *A Dervish Textbook*, London : Octagon Press, 1980, p.32.

## (5) ウリエル

### a 伝統的イメージ

ウリエル (אוריאל) は、「神 (אל) の光 (אור)」という意味である

ただし、同じ綴りではあるが AVR の真中の文字ヴァウに発音記号コレム (単音：オー) が入ると天使オーリエル אוריאל は、「神の光」又は「神の栄光」という意味になり、一方、発音記号シュレク (長音：ウー) が入ると同じ天使名でも、天使ウーリエル אוריאל は「神の火」という意味になる。

『エノク第1書』によれば、ウリエルは四大天使のひとりであるが、同書40-9、71においてはかれの座はファヌエルに置き換えられ、同書19-1及び20-2においては「物見」のひとりとされ、地獄ゲヘナを管理する懲罰の天使である。

『エズラ第4書』によれば、ウリエルはエズラに天界の秘密を明かし、エズラの幻視の旅を案内する。<sup>(35)</sup>

『エストラス第2書』においては、神がエストラスの傲慢を縛めるために派遣した天使とされる。

この多様な役割の変化は、ウリエルの仮の姿が多数あったことを物語る。

### b アウリエル・エレツィエルのテレズマ的姿形

黒色の胴着をまとう大天使の腰にはあずき色の帯で地のペンタクルが止めてある。胴着の胸には草の這う模様が淡緑色に縫い取ってあり、やはり淡緑色の縁飾りのついた腰布の下に頑丈そうな素足が覗いている。

大天使は左肩から右半身を覆って、エメラルド色の外套を垂らしている。無帽の頭に豊かな黒髪と強い意志力を秘めた黒い瞳が印象的である。翼は、大きく広げられ逆三角形を形成する。

アウリエルは、豊かに緑なす大地から出現する。草や穀物の溢れる背景の中、白いオーラに包まれた巨大な力が放射される。土の匂い、生命の脈動する力が、貴方の内部の本能的な生命力と呼応する。



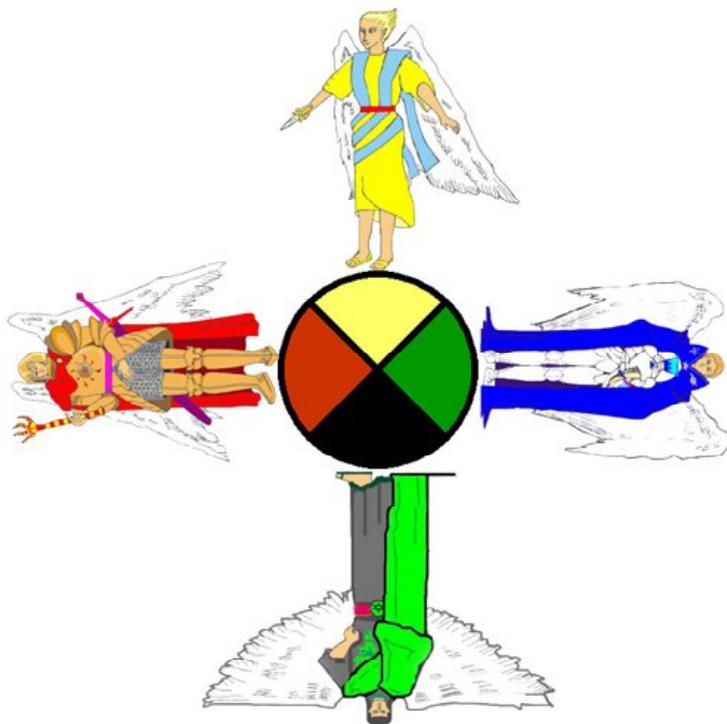
אוריאל ארציאל

(35) The Fourth Book of Ezra, *The Old Testament Pseudepigrapha Volume 1*, New York : Doubleday, 1983, pp.529f.

## (6) まとめ

以上で、四大天使のイメージの描写を終わる。これらは、四大と照応させた場合の大天使のイメージであり、「生命の木」の上の彼ら本来の座とは別であると再度念を押しておく。

生命の木の図版において、マルクトは四色に分割されているが、上方のレモン色の四半円が地の風を、右方のオリーブ色の四半円が地の水を、左方の小豆色の四半円が地の火を、下方の黒い四半円が地の地を示すごとく、四大天使はマルクトに投影された影なのである。<sup>(36)</sup>



また、小五芒星儀式などでこのイメージを用いるときは、召喚と退去どちらも同じスタイル（前向き）で大天使のイメージを作り上げること。小五芒星の儀式は「大天使の召喚・追儼」を行うものではない。大天使は、魔法円を強化するために空間にイメージとして刷り込まれるのである。かれらの出現の大きさは自分に都合の良いスケールに視覚化すれば良い。ただ、いずれも巨大な神格として捕らえた方が効果的である。

(36) イスラエル・リガルディー編『黄金の夜明け魔術全書 下』国書刊行会、1993年、436-441頁。

## 5 獅子のカバラ

### (1) イサーク・ルリアの時代背景

聖なる獅子 (ha-Ari) として知られるイサーク・ルリアの思想を語るためには、当時のユダヤ人の置かれた環境に言及せざるを得ない。それはユダヤ人のディアスポラと深く結びついてきたからだ。ここで少し迂遠ではあるが、ユダヤ人の離散の歴史がルリア思想の受容に結びついた流れを簡単に説明する。

ディアスポラ (διασπορά) とは、ギリシャ語の前置詞「分散する」(διά) と動詞「種を蒔く」(σπορά) を組み合わせた言葉である。当初は単純に、「移住」や「植民」という意味であったが、ユダヤ人の悲惨な異境生活がディアスポラの典型として知られるようになると、より冷酷で残忍なニュアンスを含むようになった。<sup>(37)</sup>

アフリカ、中東北部、南欧地区には、古代世界に覇権を称える大国が勃興した。イスラエルの民が建国したカナンの地 (パレスチナ) は、これら古代帝国の軍隊の通路であった。そのためイスラエルの国家は再三、外国勢力に征服される。アッリアとバビロニアによる捕囚<sup>(38)</sup> に続き、ギリシャの侵攻、ローマの支配を受け入れたイスラエルは、ローマ帝国の収奪と宗教弾圧に耐えかねて都合3回の反乱を起こし、<sup>(39)</sup> 最終的には首都エルサレムとパレスチナの領土を失う。<sup>(40)</sup>

エルサレムがユダヤ人国家の手にあった時期でさえ、ユダヤ人は外国に寄留する離散 (ディアスポラ) の民と、イスラエルの民という2重構造を余儀なくされ、国家を超えた複雑なアイデンティティを維持してきた。<sup>(41)</sup> ハドリアヌス帝によるユダヤ国家破却令以降は、離散が全ユダヤ人の運命となった。

アッシリアによる捕囚は短期間で不完全なものであったが、バビロン捕囚は民族のあり方を大きく変えることになった。

「万軍の主は公平の捕囚となり、・・・」<sup>(42)</sup>

---

(37) ロビン・コーエン『グローバル・ディアスポラ』明石書店、2001年、11頁。

(38) ケラーは簡明に要約した。「アッシリア人は近東の派遣を握った。ティグラート・ピレセル三世 (聖書ではブルと呼ばれている) はイスラエルの地を侵略し、多くの住民を連れ去って捕囚の身にした。その十年後、苛烈なサルゴン二世は北王国イスラエルの首都サマリヤを占領し、残りの人々 (特に上層階級) を彼の帝国内の遠く離れた地域へ移住させた。入れかわりサマリヤにはよそから植民者が移って住んだ。この事件によって北王国イスラエルは滅んだ。その十支族のその後の運命は知る術もない。・・・一世紀半の後、葬いの鐘はユダ王国のためにも鳴った。アッシリアの滅亡後に興隆したカルデア人の王国の支配者であるバビロニアの王ネブカドネザルの下に、ユダは荒廃しエルサレムは征服され破壊された。ソロモンの神殿は灰燼に帰した。二回の引き続く大規模な移動を強制され、民族の栄華は追放され、バビロン捕囚となった。一部の人々はエジプトに逃亡することに成功した。畑やぶどう園を耕していたごく少数の人々がこの地に残った。しかし、ユダに外国人は導入されなかった。」

なお、サマリヤ占領は紀元前722年、ユダ王国滅亡は紀元前586年である。(ウエルネル・ケラー『ディアスポラ 上』山本書店、1982年、15頁)。

(39) M. シュルテン『ユダヤ戦記』とローマ帝国』『ヨセフとユダヤ戦争』山本書店、1985年、77-91頁。

(40) 「それは135年頃陥とされた。・・・バル・コホバとその部下全員が死んだ。・・・ハドリアヌスは今やユダヤの中に異教の都市を建設する彼の計画を実行することが可能になった。神殿の丘から昔の聖所を思い出させるすべてのものを一掃するため、鉞が動いた。そのあとに、ローマの植民都市アエリア・カピトーナが建設され、・・・外国人が植民した。・・・そしてユダヤ人たちがこのアエリア・カピトーナに入ることは死刑をもって禁じられた。ユダヤという名称さえ抹消された。それ以後この土地は、かつて海沿いの「ペリシテ人の地」に住み、イスラエルの敵であった民族の名にちなんで、パレスチナと呼ばれるようになった。ローマの命令により、これ以後いかなるところにも「ユダヤ人の土地」が存在してはならなかった。・・・彼はユダヤ人の精神を根絶やしにすることを欲し、異教を強要した。宗教迫害をもって追い打ちをかけたのである。・・・皇帝の命令によりユダヤの律法と伝承に従うことは死刑をもって禁止された。割礼も、安息日を祝うことも、トーラーの教えも許されなかった。その他あらゆるユダヤの習慣も同様に刑罰の対象となった。」(ケラー、前掲書、102-104頁)。

(41) 左近義慈・南部泰孝『聖書時代の生活II』創元社、1982年、154頁。

(42) JESAIA CAP.5.16 Hebrew Old Testament London: The British and Foreign Bible Society, p.638.

バビロン捕囚の影響は顕著であり、捕囚から開放されたとき、荒野の祖国に戻ることを拒絶し生活基盤のあるバビロニアに残る者、パレスチナに戻り祖国を再建する者の両者に分かれた。双方のユダヤ人は思想を整合する必要があった。<sup>(43)</sup> その結果、離散そのものはユダヤ人に課された役割であるという思想が定着した。<sup>(44)</sup>

ローマ帝国軍による本国の消滅は、ユダヤ人に危機の時代をもたらした。エルサレム神殿の完全な消滅は、ユダヤ民族の精神的支柱が祭祀階級のレビ族から、<sup>(45)</sup> 律法教師に移行することを意味した。新たな民族の精神的指導者たちは、危機の時代に対応した宗教解釈<sup>(46)</sup> 及び迫害時の免責事項<sup>(47)</sup> について意志統一を迫られた。

イスラエルの神殿は、未発達な多神論宗教のように「居住神殿」ではなく「臨在神殿」であった。<sup>(48)</sup> 神殿は放浪時代の幕屋と同様に、神の臨在する座標に過ぎなかった。その座標を「契約の筐」諸共に失ったユダヤ人は、神の臨在はメシアが最終的に来臨するまで離散のユダヤ人とともにあるという「シェキナーの流謫」理論を発展させた。<sup>(49)</sup> また、メシア来臨に備えて心の中に「天界の神殿」を築き、<sup>(50)</sup> シェキナーを帰還させるという祈りも行われた。<sup>(51)</sup> ユダヤ人の宗教家はこぞって民族の宗教的、倫理的な努力を説いた。<sup>(52)</sup>

イスラム教徒の庇護の下、スペインに約千五百年間地盤を築いてきたユダヤ人がいわゆる「再征服運動」後のユダヤ人排斥により、一万人が虐殺され、五万人がキリスト教に改宗し、残余の十万人ほどが西欧各地、トルコ、アフリカ等への追放された。<sup>(53)</sup>

(43) Robert Gordis, *The Dynamics of Judaism: A Study in Jewish Law*, Indiana: Indiana University Press, 1990, p.57.

(44) 「主はあなたがたを国々に散らされる (יָרִיט) であろう。そして主があなたがたを追いやられる国民 (אֲרָמִי) のうちに、あなたがたの残る者の数は少ないであろう。」(申命記 4章27) (DEUTERONOMIUM CAP.4.27, *Hebrew Old Testament*, London: The British and Foreign Bible Society, p.283.)

(45) フラティウス・ヨセフス 『アビオンへの反論』 山本書店、1977年、216頁。

(46) 「革命 (バル・コホバの乱) の失敗による悲惨な離散は、神に背いた罪の報いであり、罪が許される時には再びカナンに復することができると、彼らは確信していたのである。」(志村武『シオニズム・ユダヤ教と仏教』人間の科学社、1972年、98頁)。

(47) ローマによる追放後、ルッダにおいて秘密裏に開かれたラビ会議における迫害時の免責事項は、次のように決着した。「その宗教のゆえに死をもって脅かされているユダヤ人にとって、自分の命を救うために表面上ユダヤ教を放棄することは許され得るか?・・・律法の教師たちの意見は分かれた。ある教師たちはすべてのユダヤ人はその信仰のためには命を捨てる義務があると主張した。他の教師たちはこの厳しい勧告を否定した。・・・長く激しい議論の末、ラビたちは妥協点に到達した。すなわち、強迫の上での殉教の死を避けるために、律法の遵守は中断することができる。ただし、偶像崇拜、姦淫、及び殺害は例外とする、というものである。」(ウエルネル・ケラー『ディアスポラ 上』山本書店、1982年、104頁)。

(48) R.E.クレメンツ『旧約聖書における神の臨在思想』教文館、1982年、147-149頁。

(49) シュバルツは、『タルムード』の引用として「シェキナーの流謫」(the Exile of the Shekinah) の神話を解説する。バビロン捕囚を預言した『エレミア書』を典拠に、ルリアの弟子が主の宮居の破壊された後に佇む黒衣の寡婦のすがたを借りた神の臨在の霊 (シェキナー) を幻視した様子を描写する。そして、ローマによる追放の後も、シェキナーの流謫は続いており、破壊された神殿を後にして、メシアが来臨するまで離散のユダヤ人とともに留まると説明した (Howard Schwartz, *Gabriel's Palace*, Oxford: Oxford University Press, 1993, pp.18f.)

(50) Victor Aptowitzer, "The Celestial Temple as Viewed in the Aggadah" in *BINAH Studies in Jewish Thought Volume 2*, New York: International Center for University Teaching of Jewish Civilization, p.2.1.2.

(51) コルバンは、『エゼキエル書』を引用しつつ、「形相の神殿」(Imago templi) のシェキナーの帰還について記述する。しかし、神殿の修復は現実空間では行われない。シェキナーは流謫の民とともにあり、かれらの霊的神殿のもとに帰還する (Henry Corbin, *Temple and Contemplation*, London: ISLAMIC PUBLICATIONS, 1986, pp.284-287)。

(52) 「汝の言及せるこの木とは何か?・・・木は何によって花を咲かせるのか。イスラエルの民によってである。彼らが善良にして義を守るならば、シェキナーが彼らのもとに住まうのだ。」(Trans. by Aryeh Kaplan, *The Bahir ILLUMINATION*, York Beach: Samuel Weiser, 1989, p.45(English) and p.220 (Hebrew). )

(53) ディモントによれば、カスティリヤのイサベラ女王やアラゴンのフェルナンド王はユダヤ人を追放することに消極的であったが、異端審問官トルケマダの強硬な主張により、追放命令に署名することになった (マックス・I. ディモント『ユダヤ人 下』朝日新聞社、1984年、22頁)。

イサベラ、フェルナンド両王によるユダヤ人のスペイン追放令<sup>(54)</sup>は、深刻な影響を双方に与えた。<sup>(55)</sup>ユダヤ人への影響は、その人的、経済的資源の損耗よりも思想面に現れた。<sup>(56)</sup>

ユダヤ人は迫害の激化に伴い新たな精神的アイデンティティーを希求した。かれらに救いを与えたのがルリアの神学である。

## (2) イサーク・ルリアの生涯

ラビ・イサーク・アシュケナージ・ルリア (R. Isaac Aschkenazi Luria) は、「聖なるラビ・イツハク」(Ha-Elohi Rabbi Yizhak) の頭文字アレフ・レシュ・ヨドを並べ、アリと呼ばれた。<sup>(57)</sup>

1534年、エルサレムの東欧系ユダヤ人(アシュケナージ)ルリア家に生まれたイサーク・ルリアは、8歳で父親を亡くし、母セファルディ・フランセスに連れられエジプトに移住した。同地で母子を支えた伯父のモルデカイは、少年の天才を認め学者ベザレル・アシュケナージに預け、後にラビ・ダビデ・イブン・ジムラ (Ridbaz) の学院で学ぶ。

1550年代の始めカイロでヘブル語の読めないマラーノの商人から『ゾーハル』の写本を入手したルリアは、その内容に衝撃を受け、生涯をカバラの研究に費やすことを決意した。

15歳で従姉妹(伯父モルデカイの娘)と結婚し、家庭的義務を果たしたルリアは、ナイル河中洲のローダ島に草庵を編み8年間にわたる瞑想と思索の生活をはじめた。その生活は週日5日間は草庵にこもり、週末のみを家族とともに過ごすという徹底ぶりであったと言う。

1569年頃、妻と子らを伴いエジプトを離れ故郷エルサレムに向かった。

当時のパレスチナのユダヤ思想の中心地はエルサレムではなくガリラヤ地方の町サフェドであった。ルリアはエルサレムを経てサフェドに移住した。そして、『石榴の園』などで高名なラビ・モーゼス・ベン・ヤコブ・コルドヴェロ (1522-1570) に弟子入りした。<sup>(58)</sup>このカバラのサークルでは、『ゾーハル』、『セフェル・イェツィラー』及びヘハロート神秘主義を教えていた。

1570年にコルドヴェロが死去したとき、長老ヨセフ・カロの主催する葬儀のさなかに、ルリアはコルドヴェロの棺に付き沿う2本の火柱を幻視し、それを列席者にも見せた。

この事件を契機にルリアはサフェドのカバラ主義者の中心人物となる。

かれは師匠のコルドヴェロや長老ヨセフ・カロなどとは異なり、自分の思想を文字に残そうとはしなかった。弟子のひとり、その理由を尋ねたとき、次のように語っている。

「そんなことは不可能です。・・・すべては互いに繋がりあっているからです。私は何かを語るために口を開くことは殆どありません。そのようなことをすれば、海の防波堤が決壊して、そこらじゅうに氾濫が起こるような気がします。ですから、どうして私の魂が感じとったことをそのまま語らなければならない理由があるのでしょうか。ましてや、それを1冊の書物に書き

---

(54) スペインのカトリック両王フェルナンドとイサベルは、つぎのような1492年3月31日付のユダヤ人追放令によって、恐怖政治の始まりを宣告する必要があった。「我々は、男女を問わず全ユダヤ人に、我が王国を退去し、決して戻らぬよう命令する旨を決意した。洗礼を受ける用意のある者以外は、誰彼の区別なく、1492年7月31日までに我が領土を出て、決して戻って来てはならぬ。もし戻って来た場合には死刑に処し、その持ち物すべてを没収するものとする。」(小岸昭『離散するユダヤ人』岩波書店、1997年、iii頁)。

(55) 上田和夫『ユダヤ人』講談社、1986年、54-56頁。

(56) ヨセフ・ダン教授(ヘブライ大学ユダヤ思想学部長、ゲルショム・ショーレム記念カバラ教授)は、「ユダヤ哲学の名声は、スペイン追放後劇的に失墜した。このユダヤ文化の失墜という衝撃は、続く数世紀に幾つかの地域では文化そのものを消滅させるほどだった。ユダヤ思想界は、スペインからの物質的及び霊的双方の追放という大激変を考慮し、新しい観念、ユダヤ的伝統の新解釈を求めていた。」と強調した(Joseph Dan, *JEWISH MYSTICISM and JEWISH ETHICS*, Seattle: University of Washington Press, 1986, p.78.)。

(57) 以下の伝記的記述は主としてラビ・クラインの『創造のカバラ』序文による(Eliahu Klein, *Kabbalah of Creation : Isaac Luria's Earlier Mysticism*, Northvale : Jason Aronson Inc., 2000, pp.6-20.)。

(58) Lawrence Fine, *Physician of the Soul, Healer of the Cosmos : Isaac Luria and His Kabbalistic Fellowship*, Stanford : Stanford University press, 2003, p.81.

著さなくてはならない理由があるでしょうか。」<sup>(59)</sup>

野に座して深遠な思想を語ることを常にしたルリアの代弁者は、ダマスカス生まれの弟子ハイム・ヴィタル（1543-1620）であった。<sup>(60)</sup>

1572年にコレラに罹患したルリアが38歳という若さで地上を去ると、ヴィタルは弟子たちの長上として秘密主義を採用し、ルリアの思想の独占を図る。ヴィタルはルリアの思想が無制限に流布するのは危険であるとして、兄弟弟子たちの保管する講義録を強制的に提出させ、それを二度と返却しなかった。<sup>(61)</sup> かれの代表的著作はルリア思想の結晶たる『八つの門』（『生命の木』）である。しかし、生前はその出版を許さなかった。

このままではルリアの思想も歴史の闇に埋もれるところだったが、ヴィタルの草稿の不正な写本を入手したイスラエル・ザールークとその弟子アブラハム・コーヘン・ヘレラが著作の形で世に流布させる。特にヘレラがスペイン語で書いた書物は、ラテン語の抄訳版が作成され、かの『カバラ・デヌダータ』に、『天界の門（Porta coelorum）』として収録され、普及した。<sup>(62)</sup>

ルリアの思想は、ヴィタルの努力にもかかわらずルリアの死後20年を経ずして広範に流布し、17世紀の前半にはユダヤ人世界全体に急速に浸透し、その神の捕囚と解放の神学は、すべてのユダヤ教実践倫理の規範となった。<sup>(63)</sup>

ルリア学派から伝播した獅子のカバラ（カバラット・ハ・アリ）は、ポーランド、リトアニア地方に回覧され、17世紀中頃にラビ・モーシェ・カイム・ルツァット（ラムハル）が、ルリア思想を集大成する。<sup>(64)</sup>

ユダヤ人は、ルリアの神秘思想を日常生活に取り込み、<sup>(65)</sup> その倫理的な使命感を高揚させることで精神的危機を乗り越えた。離散及び流謫の過酷な現状は、神話的使命にまで昇華され、<sup>(66)</sup> 世界を救う実践的機会であるとされた。<sup>(67)</sup>

ルリアの思想の中心概念は、ツィムツム（神性原理の自己内部への収縮）、シェビラー（容器の破壊）及びティクーン（修復）である。<sup>(68)</sup> この神学思想がユダヤ人に共通する実践哲学、

---

(59) ゲルシヨム・ショーレム『ユダヤ神秘主義』法政大学出版局、1985年、335頁。

(60) E. ホフマン『カバラー心理学』人文書院、2006年、47頁。

(61) Klein, op. cit. p.19.

(62) Knorr von Rosenroth, *Kabbala denudata*, Vol.1, New York : Olms, 1999, PORTA COELORUM pp.1-192. (同書には、通巻の頁数はない。『天界の門』は、第一巻の巻末付近にある。)

(63) ヨセフ・ダン「ユダヤ神秘主義：歴史的概観」『ユダヤ思想 2』岩波書店、1988年、177-178頁。

(64) ラムハルは齢14にして、誰も彼の両親さえ知らなかったが、アリ・ザルのカバラのすべてを心で理解した (Rabbi raphael Afilalo, *The Kabbalah of the Ari Z'ral, according to the Ramhal*, Montreal : Kabbalah Editions, 2004, p.15.)

(65) 「かくして、ルリアのカバラの世界は、偉大なる『流謫と救済の神話』として姿を現す。そして、この神話が絶大な重みを有し、ルリア以後の世代のユダヤ史に意味をもちつづけたのは、ほかでもない、このような神話がユダヤ民族の経験に深く結びついていたからである。」(ゲルシヨム・ショーレム『カバラとその象徴的表現』法政大学出版局、1985年、162頁。)

(66) 「カバラーとは<追放>の教説、<追放>を説明づけるために案出された影響理論なのだ。・・・スペインからの<追放>の後に、カバラーの後発性のヴィジョンは強度を増し、究極的にはルリア的神話において、<創造>自体が一種の<追放>とされるに至った。」(ブルーム『カバラーと批評』国書刊行会、1986年、115頁。)

(67) 「離散ユダヤ人に託された使命とは、彷徨いつづける聖なる火花を神格と再統合させることによって、破壊された器の修復「ティクーン」を成就し、かくて救済者到来の時期を早めることにある。・・・こうしてまた「ユダヤ人であること」から顕現してくる追放の問題は、そもそも「外に置かれた者」にほかならない人間の現存 (Existenz) が追放 (Exil) を本質的にかかえこんでいるという、普遍的現実をもはじめて我々に意識させたのである。」(小岸、前掲書、12-14頁。)

(68) ゲルシヨム・ショーレムのカバラ文献の翻訳者でもある小岸は、ルリアの神秘思想と流謫の関連付けを行った (小岸昭『スペインを追われたユダヤ人』人文書院、1992年、63頁。)

歴史観として敷衍された。<sup>(69)</sup>

歴史学者アントニー・スミスはエスニシティ中心主義の中軸にある神話力の類型として、「王朝的神話力」と「共同体的神話力」を示したが、ユダヤ民族の特徴は宗教性に根ざした「共同体的神話力」の強さにある。<sup>(70)</sup>

離散ユダヤ人の集団が、民族的アイデンティティーを維持するための主要な手段はユダヤ教であった。<sup>(71)</sup>かれらが寄留先の国民に呑み込まれず、ユダヤ文化を維持するためには、宗教中心の価値観を保持する必要があった。<sup>(72)</sup>

ルリアの神学を取込んだ宗教観は、極めて特殊なものになった。2千年近い離散の体験により、民族単位での「捕囚」(galut) 自体が、神の命令であるという見解を示すに至った。<sup>(73)</sup>

離散ユダヤ人の(神への)「三つの誓い」は、この人目に立つ流浪民族が異民族のなかで生きるための方針と直結していた。つまり、歴代の宗教指導者が語り続けた「神殿の壁を昇るなかれ、(寄留する) 国家に反抗するなかれ、終末を求めるなかれ。」<sup>(74)</sup>というある種の倫理規程は、かれらが多民族に忌避されながら離散の生活基盤を築く最低条件であり、新たなユダヤ文化でもあった。<sup>(75)</sup>

現代のユダヤ教徒は、朝の祈りに「信仰の13箇条」<sup>(76)</sup>を含め、メシアの来臨を疑わず、離散からの解放を「堅く信じる」ことを信仰告白している。<sup>(77)</sup>

---

(69) 「ユダヤ人の歴史を三幕からなる長大なカバラー的ドラマと考えてみてはどうだろう。一幕の長さは、それぞれ2000年である。第一幕では一ツィムツムすなわち「テーゼ」ーギリシャ悲劇のように、ユダヤ人の主人公たちが神からつぎからつぎへとすでに先の運命が定められている役をもらう。・・・カバラー的ドラマの第二幕ーシェピラート・ハ・ケリームすなわち「容器の破壊」ーではユダヤ人は破滅し、離散している。・・・それとも、いまは、三幕ーティックすなわち、「回復」ーが始まるまでの休憩時間なのだろうか？」(マックス・I.ディモント 『ユダヤ人 下』 朝日新聞社、1984年、238-239頁)。

(70) アントニー・D.スミス『ネイションとエスニシティ』名古屋大学出版会、1999年、69-81頁。

(71) アラン・ウンターマン『ユダヤ人ーその信仰と生活ー』筑摩書房、1983年、118頁。

(72) 中西輝政『なぜ国家は衰亡するのか』PHP研究所、1998年、107-109頁。

(73) ラヴィツキー教授(ヘブライ大学ユダヤ思想学部議長)は、13世紀のユダヤ人宗教指導者ラビ・エズラの言葉「メシアの来臨まで、具体的なイスラエルの地は必要なく、求められることもない。シェキナーは離散の民とともにあり、イスラエルの地にはないからだ。」を紹介している(Aviezer Ravitzky, *Messianism, Zionism, and Jewish Radicalism*, Chicago: The University of Chicago Press, 1993, p.218.)。

(74) Op. cit., pp.211-215.

(75) ディモントは、1章を離散時の文化的変質に充て、「存続のための新しい方法を考え出したのである。それが『離散のユダヤ主義』であった。・・・離散によってユダヤ人には新しい文化が生まれた。・・・パレスチナをふたたび征服して、そこにユダヤ国家を建設しようという考えを捨てよ、というものだった。パレスチナはただ魂のふるさとであるに過ぎない。敬虔なユダヤ人がそこで死ぬために行くのならかまわない、ということだった。」と語った(マックス・I.ディモント『ユダヤ人 上』朝日新聞社、1984年、123-128頁。)

(76) 信仰の13箇条(ShLSh OShR OQRIM)は、ユダヤ教の朝課で行われる「われ堅く信ず」(ANI MAMIN)に始まる13の誓いである。11条から13条が離散の運命と関連している。「11条 われ堅く信ず、御名は頌むべきかな、創造主は。その命を守る者にむくい、そむく者を罰し給うを。/12条 われ堅く信ず、よしや遅かるともメシアの来たり給うを。われは日々彼の来るを待たん。/13条 われ堅く信ず、御名は頌むべきかな、創造者の聖旨にかなうとき、死人は甦り、照覧のうちに永遠に揚げられるを。」

(SEPHATH EMETH (Speech of Truth), New York : Hebrew Publishing Company, n.d., pp.90-92)。

(77) 志村武『シオニズム・ユダヤ教と仏教』人間の科学社、1972年、105頁。

### (3) イサーク・ルリアの思想

ルリアの思想は、前出のように希釈され、或いは増強されて離散ユダヤ人の倫理的基盤として、実生活の中に生きる神秘主義として結実した。アリ自身は著述を残さなかったので、かれの口述を書き留めたヴィタルらの草稿が1次資料となる。それらを編集したものが『アリの書物』(Kitvei Ari)である。前述したようにアリの弟子たちや、その教団が数々の「獅子のカバラ」に関する2次資料を作成していく。前述したラムハルは、1次資料である『十の輝ける流出』の解釈書になる2次資料の『生命の木の精髓』を著述した。<sup>(78)</sup>

しかし、そのユダヤ人コミュニティにおける顕著な影響力とは相反し、ルリアの学問的評価の歴史は意外に浅い。

その端緒は、ドイツ人フリーメーソンであるフランツ・ヨーゼフ・モーリトアの『歴史哲学 或いは伝統について』(1827年)であった。<sup>(79)</sup>

ゲルショム・ショーレムはこれを読み、ルリアの思想を探索することになる。

それではルリアの神学とは何であったのか。

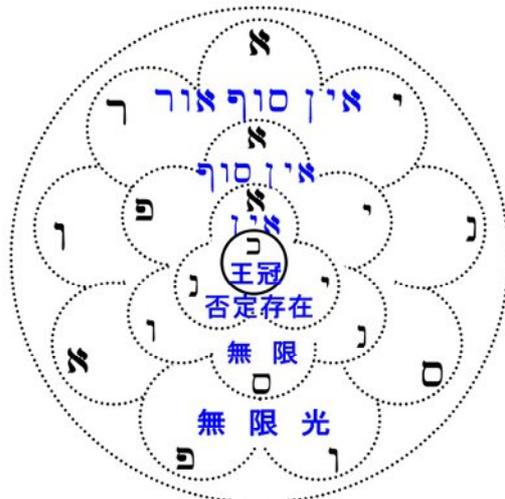
ルリア神学の提示した、三つの斬新な概念がある。

- 「収縮」( צמצום ツィムツム)
- 「破壊」( שבירה シェビラー)  
または、「容器の破壊」( הכלים שבירתם シェビラス ハ・ケリム)
- 「修復」( תיקון テイクーン)

#### a 収縮 (ツィムツム)

ルリアの学んだ『ゾーハル』の体系は、神話的創造の起源をアイン・ソフに設定した。ゾーハルの伝統のなかでは、右図にあるように、それぞれの名前の文字数に応じた葉数の花卉をもつ3重の花房として現された。3重の否定存在を示す「無」→「無限」→「無限光」と外側に連鎖する花卉の最後の流出が花心にあるケテルであり、すべての世界はこの中心から流出する。<sup>(80)</sup>

しかし、『ゾーハル』の体系においては無限光の生成からケテルの流出については、明確な関連が説明できなかった。ルリアは、流出を発動する神聖なる力学を発見した。そして、13世紀中頃のトラクトから神の原空間への集中と、原空間における不在を意味するツィムツムという用語を借用し、その力学を説明する用語として定義



(78) R. Afilalo, op. cit., pp.23f.

(79) モーリトアは、このカバラ哲学に関する韜晦な書物の中でルリアを次のように語った。

「完全な体系の下に整備され、最高の原理から構成されたひとつの学説が、ラビ・イサク・ルリアによって打ち立てられた。その教説はことによると、かつて人間精神から生み出されたあらゆる作品中最も深遠で、かつ最も崇高な神学作品であると言えるかもしれない。あらゆるカバラ著作のなかで、それは『ゾーハル』に比肩し得るばかりでなく、最も内奥の諸力から編み出された、いわば氣宇壮大で開放的な一遍の『ゾーハル』なのだ。」(小岸昭、『離散するユダヤ人』、9頁。)

(80) S.L.MacGregor Mathers, *The Kabbalah Unveiled*, London : Routledge Kegan Paul, 1970, p.20 opp.

しなおした。<sup>(81)</sup> アリのカバラでは、「ツィムツム」とは神が神自身の内奥に収縮するという意味である。

ラムハルの解説書においては、「主が意志を発し、森羅万象を創造するため、被造物の存在できる空間 (קומו) を作るために光を収縮させた。空間なくして何者も存在できないからだ。」とある。<sup>(82)</sup>

その情景を神話的な語り口で描写すると次のとおり。

原初に創造主は、全空間を「上なる光 (オール・エリヨーン。אור עליון)<sup>(83)</sup>」で満たしていた。上なる光は、文字通り無限光であり、境界や限界というものはなく、すべての宇宙に充溢していた。そのため創造主のほかには何もなく、主はいかなる影響力を行使することもできず、ひとりだった。<sup>(84)</sup>

主が万物の創造を意図したとき、最初になすべきことは上なる光に限界を定めることであった。主の光はあまりにも神聖であり、強烈であったため、上なる光の近傍にいかなる存在も許さなかった。そこで主は光の放射力を弱め、境界を定めて、被造物が存在できる空間を生み出し、峻厳と限界の概念を開示した。これがアインソフのツィムツムであり、ある空間からの上なる光の収縮、そして収縮により生まれた空間を上なる光が周回した。

しかし、主がすべての光を消した訳ではない。かの「白き火の上に黒き火で書かれた」とは、限定された光の不在を表現する文言である。ヘブル語の文字は白地の紙のような「白き火」の上に黒墨のような「黒き火」で書かれる。それは白日の陽光のなかに淡い蠟燭の光を見るようなものである。つまり、見える部分は陰画のようなものである。

そして、否定存在の光たる上なる光は、被造物の創造される空間の残光を囲い込む。<sup>(85)</sup>

従って、ナハマニデスの言うように「主は光を形作り、闇を創造された (יעצילר・オール・ヴェ・バーラー・コーシェク。אור ובורא חושך)。」とも理解できる。すなわち光は主と不可分であり、光は「無からの創造」の対象ではなく、創造以前から存在した。従って、主は闇を創造されたのだ。<sup>(86)</sup> そして、この闇こそが「黒き火」、つまり、被造物の存在が可能な微かな光の満たされた空間である。

ツィムツムにより造り出された、神の光の存在しない空虚な空間をハラルという。ハラルとは「窪地」の意味であり、その空間に光が欠けていることを示す。

ハイム・ヴィタルによるルリアの伝書『十光の流出』では、次のように語られる。

「虚の空気 (אוויר ריקני)、窪地 (הלל) は、単一の境界なき光 (אור נ) に満たされ、頭もなく、尾もなく、始まりもなく、終わりもなく、万物は単純で滑らかに均衡が取れ、正しく等しくひとつの同じものの親和性のなかにあった。

そは終わりなき光 (אור נ) と呼ばれた。・・・主が自らを内にある中間点 (נקודה אמצעיתל) に収縮 (צמצם) する前に、光を制約 (האור צמצם) し、主自らを制約 (את עצמו צמצם) した。光は中間点の周囲に収縮し、窪地、虚の空気、真空が中間点を正確に取り巻いていた。」<sup>(87)</sup>

(81) 小岸昭『離散するユダヤ人』岩波書店、1997年、155頁。

(82) Rabbi Afilo, op. cit. pp.26.

(83) Rabbi Yehuda L. Ashlag, *Ten Luminous Emanations from Rabbi Isaac Luria, Vol.1*, Jerusalem : Research Centre of Kabbalah, 1969, p.56.

(84) この件について『ティクネイ・ゾーハル』57章に、主の全能と内在を表現する「かれが空となる場所はない。」という有名な表現がある。その意味ポレンノイのラビ・ヤーコフ・ヨセフの著作 (R. Yaakov Yosef of Polennoye, Ben Porat Yosef, "The Place that was't" *The Religious Thought of Hasidism, Text and Commentary*, Hoboken : The Michael Scharf Publication Trust of Yeshiva University Press, 1999, p.21.) を参照のこと。

(85) Rabbi Moses Luzzato, *General Principles of Kabbalah*, Jerusalem : Research Centre of Kabbalah, 1984, p.48.

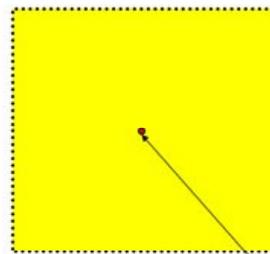
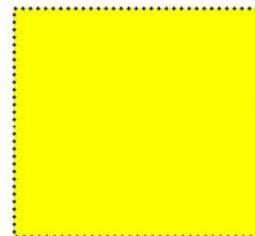
(86) Rabbi Ashlag, op. cit., pp.43f.

(87) Rabbi Ashlag, op. cit., pp.59-74.

最初にわかりにくい単語を解説する。

中間点とは、アインソフが創造を意志した瞬間にアインソフの内部に仮説されたツィムツムのための焦点である。

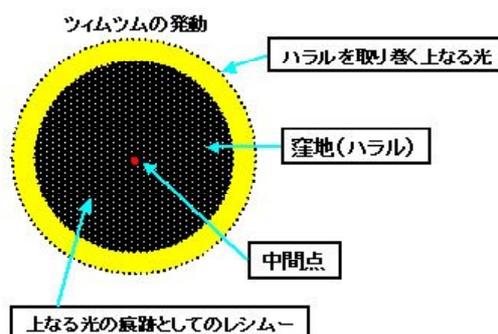
そもそも「上なる光」には、初まりもなければ、終わりもない。従って、その中間点とは字義的には無意味である。しかし、原初の「単純で滑らかな無限定の意志」には、存在の階級、ニュアンス、程度の違いもなければ、大小の差違もない。しかし、ここに「受け取ろうとする意志」が生まれる。そして被造物という成果を受け取るためには、ツィムツムの起点となる中間点を初まりも終わりもない光のなかに設定する必要があった。



中間点

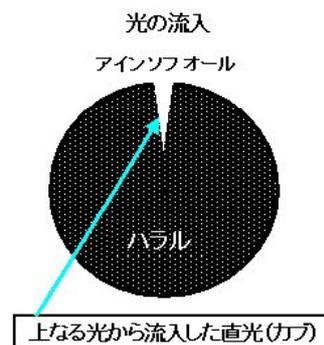
ツィムツムにより中間点を意識したアインソフの状況を右図のとおりとする。黄色の領域は無限定の「上なる光」の領域である。中心に示した深紅の点は仮想の「中間点」である。仮にそのイメージを丸いかたちで表現したが、「上なる光」に境界がある訳ではない。ツィムツム以前には、主の光の外側も内側も存在しない。最初の創造のはじまる直前の中間点はツィムツムにより、主の光の内側となるはずの仮想点である。<sup>(88)</sup>

ツィムツムが発動し、主の意志により「上なる光」が制約され、中間点の周りから収縮し、中間点を丸く囲んだ様子が右図である。このとき中間点はすでに特別な座標ではない。中間点の周りは窪地（ハラル）となり、このハラルの中には「上なる光（オール・エリヨン）」と比較すると、光の痕跡ともいべき粗い光が存在する。それをレシムーという。レシムーとは「痕跡」という意味である。そして、ハラルが生み出した万物の存在可能な場を、被造物は宮殿（マコム）と呼ぶ。



次に発生するプロセスにおいて、ハラルを取り巻くアイン・ソフ・オールから「直光（カブ）」がレシムーのなかに流入する。右に図式化したように薄暗いハラルの外側はすべて「上なる光」で埋め尽くされている。その純粋な光がハラルのなかに、直すぐな光（**כב** カブ）として射し込む。

カブとレシムーの関係は、あたかも靈魂と肉体の関係と言われる。<sup>(89)</sup>



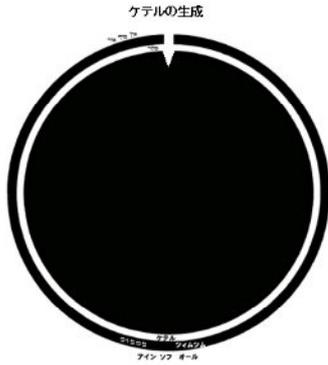
「中間点の片側から光が引き出された。」<sup>(90)</sup>

むしろ、この描写は時間の生まれる前の神話的世界を物語っており、以下のプロセスは順番に生じた訳ではない。小生が時系列に表現しているのは、神的因果を人間に分かりやすく翻訳しているためであり、誤解のないようにしてもらいたい。

(88) Rabbi Ashlag, op. cit., pp.68f.

(89) Rabbi Afilalo, op. cit., p.27.

(90) Rabbi Ashlag, op. cit., pp.74f.

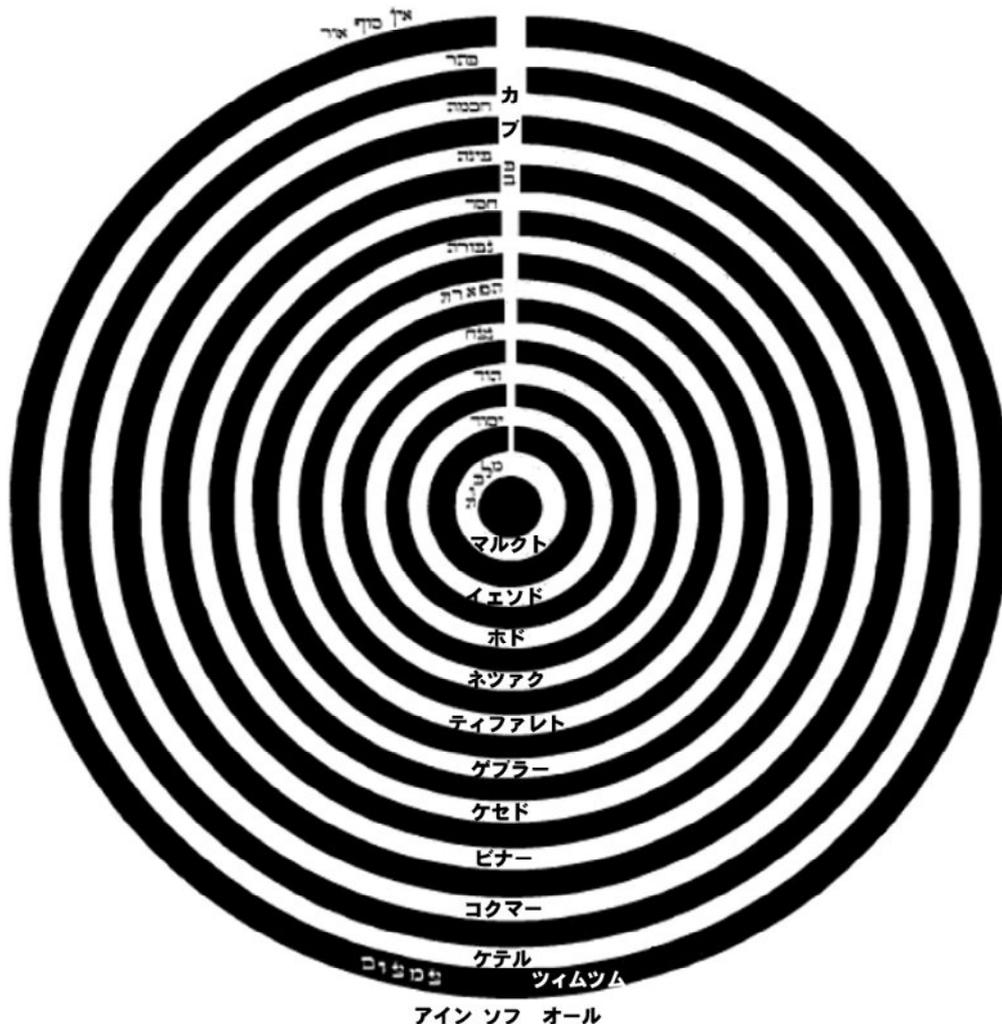


直光はハラルのなかで外側から10セフィロトを生成する。各セフィロトは同心円状に、或いは外側が内側を包み込むタマネギの皮のように構成される。そのセフィロトを貫き直光は最後のマルクトを生成するまで真っ直ぐにハラルを貫く。

左図はレシムーの内部に貫入したカブがケテルを生成した瞬間である。ケテルはカブの流入した深さで、レシムーを取り巻くように周回する。<sup>(91)</sup>

この周回する光が下図に示されるように、10光、最初の10セフィロトを形成する。この10セフィロトは「周回するセフィロト (セフィロト ハ・イグリム)」と呼ばれる。

下図の黒い部分はハラルの内部に痕跡として残るレシムーであり、それを包み込む10の同心円がセフィロトである。中心には最奥部のレシムーを囲い込むマルクトが見える。カブはアイン・ソフ・オールから真っ直ぐにマルクトまでハラルを貫いている。



この段階では10セフィロトは直線的、または、同心円的な配列であった。

(91) この図は説明のために作成したものであり、伝統的表現では次図のように10光を同時に生成する。

次の段階として、光が三つの柱に再配列された。すなわち、右の慈悲（**קדוּת**）の柱、左の峻烈（**קְדוּשָׁה**）の柱及び中心の中庸（**קְדוּשָׁה**）の柱の三柱である。この最初の流出は、将来のすべての流出の原型となった。

流出した光が10セフィロトに配列された最初の配置、或いは最初の世界は、アダム・カドモンと呼ばれた。レシムーとカブの結合は、セフィロトからなる巨大な人間の姿（**קדמון** **לשון קדמון** シウール・コーマー）として出現した。

そして、アダム・カドモンから四つの官覚が流出した。

その官覚とは、視覚、聴覚、嗅覚及びことばである。これらはアダム・カドモンの目、耳、鼻及び口から流出した。<sup>(92)</sup>

アダム・カドモンの耳からは、サグ（**שג**。63）の名前の位相の光が現れる。10の直線のセフィロトは左耳から、10の周回するセフィロトは右の耳から現れる。

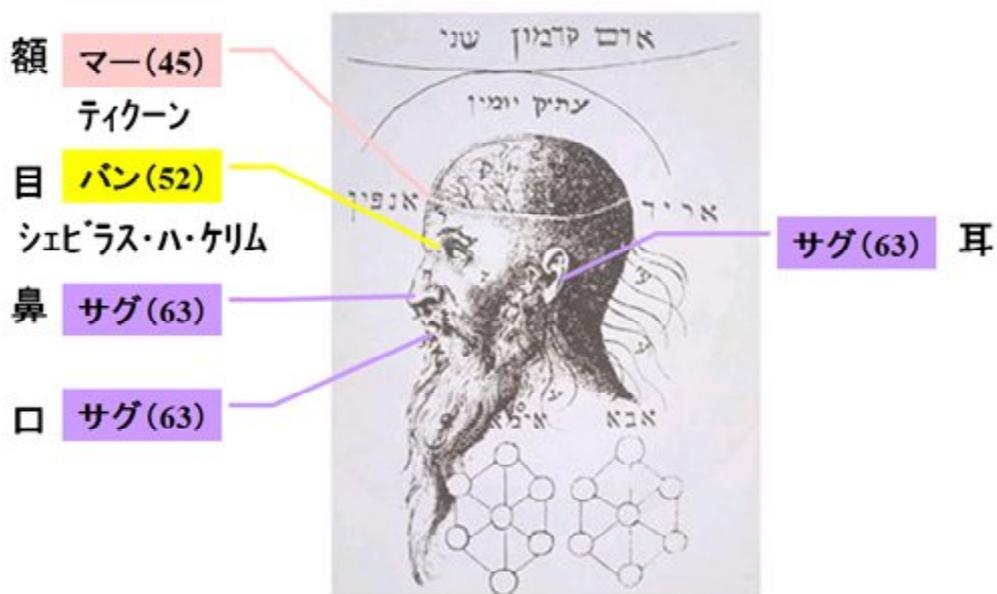
鼻からは、同じくサグ（63）の名前の位相の光が現れる。10の周回するセフィロトは右の鼻孔から、10の直線のセフィロトは左の鼻孔から出現する。

口からは、同じくサグ（63）の名前の位相の光が現れる。10の内的セフィロト、10の周回するセフィロトである。

目からは、女性的なバン（**בן**。52）の名前の位相の光が現れる。これが次に示す「容器の破壊」を生起させた。

額からは、男性的なマー（**מר**。45）の名前の位相の光が現れる。この男性的な光が破壊されたセフィロトのティクーンを行う。マー（45）は、バン（52）とともに宇宙群を導くすべてのパルツフィムを創生した。

これらの流出群から、他の四界（アツィルト、ブリアー、イエツィラー及びアッシャー）が開放される。



(92) ラビ・アフィラロは、これらの隠喩的用法を危惧して「カバラの用語法において、人体の各部名称を用いた場合は、その部位が象徴する秘教的な諸力を表現している。それらのレベルにおいては、物理的存在を意味するものではない。われわれが耳、口、或いはその他の物質的表現を表明したときは、その目的は内的感覚もしくはその表現する位置を表したいのである。」と付言している (Rabbi Raphael Afilalo, *Kabbalah Dictionary*, Montreal : Kabbalah Editions, 2005, p.46. )。

## b 容器の破壊 (シェビラス・ハ・ケリム)

ルリアに先行する「容器の破壊」(שִׁבְרַת הַכְּלִי שֵׁבִירָאִים シェビラス・ハ・ケリム)の説明は『ゾーハル』のうち、『カバラ・デヌダータ』にラテン語訳された三部のトラクト<sup>(93)</sup>に散見されるほか、原始世界の建造と破壊という物語が『ミドラシュ』(Bereishit Rabba 3:7, 9:1)にある。しかし、先駆者の漠然とした説明と異なり、ルリアは明快なかれのコスモロジーのなかに「容器の破壊」を概念化した。

さて、まず最初にアダム・カドモンの中から、女性的な位相のパン(יָקוּ)の10セフィロトが出現したとき、上位の3セフィロトは光を受容し、内包した。3セフィロトは三柱の頂部を形成するため、三柱の配置にあった。しかし、下位の7セフィロトは三柱配列にはなく、光の流入に堪えきれず崩壊した。

セフィロトとは固有の性質をもつ外側の器(形相)(קְרִי קְרִי)と内側に盛られた均質な光の核からなる。しかし、上位の3セフィロトから下位の7セフィロトに光が流出したとき、下位セフィロトの外側の器が、堪えきれずに砕けたのである。崩壊したセフィロトに内包されるはずだった光は上昇し、神のもとに帰還した。

この「容器の破壊」の原因は何であろうか。

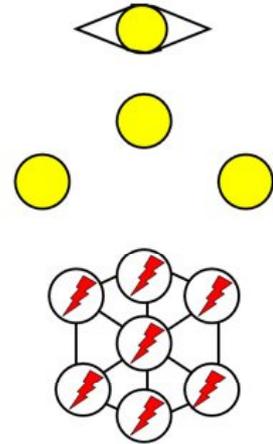
そのためにはハラルの性質を再考する必要がある。ツィムツム以前は、神聖な光の質と不純な異物が未分化の状態に混在していた。従って、ツィムツムは神性の自己浄化でもあった。ハラルには、微量の光が残され、水を空けた水桶の内側に残る微かな水滴のような光の残滓レシムーがあった。この不完全な光が「容器の破壊」を惹起した。

レシムーの中にある反対勢力が、先に述べたように下位の7セフィロトを不完全な配置に置いたのである。その反対勢力とは、最初の「反対側」(שִׁטְרָא אֲחָרָא שִׁטְרָא אֲחָרָא シトラ・アハーラ)<sup>(94)</sup>の発現であった。

この宇宙の崩壊、シェビラーにおいて、最初の3セフィロトの容器(ケリム)は破壊されなかった。殆どの光は上位セフィロトまで上昇したが、288の聖なる火花が下降した。下位世界は光なくして存在できないからである。

そして、破壊された容器の破片に閉じこめられたまま下降した光もあった。

そして、下降した光と破片の混合物が独自の世界を作り神に対抗しようとしたものがシトラ・アハーラの世界である。シトラ・アハーラは「エドムの八領主」(『創世記』36章31節)と連結して語られる。



(93) いわゆる『秘密の書』(SifredeTzeniut Z II 176b-179a)、『大聖集会』(Idra Rabba Z III 127b-145a)、『小聖集会』(Idra Zutta Z III 287b-296b)である。

(94) ゴーハル文献群等に多々登場する。『ゾーハル』から一例を挙げると下記のとおり。

ACHAREI MOT 104, *The Zohar*, 15, New York : The Kabbalah Centre International Inc, Revised Edition 2003, p.238-239.

## c 修正 (ティクーン)

ヘブル語のティクーン (תִּיקוּן)。複数形: テイクニム תִּיקוּנִים) には、修復、矯正、機能、関連及び行動などの多数の意味がある。獅子のカバラのコンテキストにおいては、次のように解釈される。

- 修 復: 世界群を修復しようとする最初の流出
- 矯正/関連: セフィロトとパルツィフムとの構築及び相互関連
- 行動/機能: 世界を調整するための各パルツィフムによる行動及び機能
- 矯 正: 霊魂 (ネシャモース) のための矯正作用

シェビラーのあと、288の火花が崩壊した世界の生命をつなぐために下降した。

この288の火花は、アブ (אב) の四つの位相、OB (72)、SG (63)、MH (45) 及びBN (52) を示す。つまり、 $72 \times 4 = 288$  である。

ティクーンは男性的なMH (45) と女性的なBN (52) の共同作用であった。そして、柱の配置にセフィロトを並べ替えたのち、ティクーンが成就する。

その神学的細部については割愛する。

ティクーンの継続に関しては別の神話的説明がある。

神は純粋な光であり、反対側の闇に近づくと、闇は逃げてしまう。従って、この状況を修復し、闇に捕らわれた光を解放するためには、ティクーンを遂行する被造物が必要である。

神は再び一条の光を放ち、セフィロトを再構築する。この第2の試みは、アダムを介して行われた。しかし、新たな世界は地下の「反対側」の諸力と闘争を余儀なくされた。そして、アダムの精神ではなく肉体の不完全さの故に「第2のシェヴィラー」を引き起こしてしまう。

第3の試みは人間を介して行われた。イスラエルの民と契約を結び、シナイ山でモーシェに律法が授けられたときは、ティクーンが成就するかに見えた。しかし、イスラエルの民は金の仔牛の像を造り、再三、シェヴィラーが起こった。神聖なる火花は、深い闇に下降した。

歴史とは、このシェヴィラーとティクーンの繰り返し、絶えざる神話的闘争の記録であるとルリアは説く。そして、ティクーン最大の武器は、離散ユダヤ人が正しい宗教生活を送ることである。それは一見些細なことのように、実は多大な負担をユダヤ人にかけることになる宗教的規範となった。

一人の人間が貧しい同胞を助け、純粋な心で祈り、或いは儀礼的食事に預かるとき、一つの火花が闇の捕囚から解放される。しかし、その逆に人間が罪を犯し、儀礼的、倫理的規範を一つ破る度に、一つの火花が闇に捕らわれる。

考え方ではなく、行為に責任が伴うという点でルリアの倫理神学は大変な重荷を離散のユダヤ人に負わせることになる。それは個々人の負債であるばかりか、全人類、全世界に対する責任を果たすことに結びつくのである。

後にこの思想を受け継ぐハシディズムの思想家は、世界が現在も継続した創造の状態にあり、世界は創造をもたらした原初の言葉の力による再生を必要とすると語った。<sup>(95)</sup>

獅子のカバラのGDの神話体系への展開については、『第5講義文書』に詳述する。

(95) マルティン・ブーバー『ハシディズム』みすず書房、1997年、24頁。

#### (4) 関連文献

- 『ルリア講義録』(Kitav Ha Ari)  
全18巻 カバラ・センター (ヘブル語版)
- 『生命の木：アダム・カドモンの宮殿』  
*The Tree of Life: The Palace of Adam Kadmon - Chayyim Vital's Introduction to the Kabbalah of Isaac Luria.* Arizal publications, 2008.
- ラビ・イエフダ・アシュラグ編『10光の流出』(アリの講義録)  
Edited by R. Yehuda L. Ashlag, *Ten Luminous Emanations from Rabbi Isaac Luria.*  
Volume 1 & 2, Jersalem : Research Center of Kabbalah, Vol.1 1969, Vol.2 1973.
- ラビ・エリアウ・クレイン編『創造のカバラ』(アンソロジー及び解説)  
Edited by Eliahu Klein. *Kabbalah of Creation : Isaac Luria's Earlier Mysticism.*  
Northvale : Jason Aronson Inc., 2000.
- ハイム・ヴィタル『幻視の書』(自伝)  
R.Hayyim Vital & R. Yizhak Isaac Safrin of Komarno. *Jewish Mystical Autobiographies : Book of Vision and Book of Secrets.* New York : Paulist Press, 1999.
- ローレンス・ファイン『霊魂の医師、宇宙の癒し手』(評論)  
Lwarence Fine. *Physician of the Soul, Healer of the Cosmos : Isaac Luria and His Kabbalistic Fellowship.* Stanford : Stanford University Press, 2003.
- ラファエル・アフイラロ『アリ・ザルのカバラ』  
Rabbi Raphael Afilalo. *The Kabbalah of the Ari Z'al : according to the Ramhal, rabbi Moshe Hayim Luzzatto.* Montreal : Kabbalah Editions, 2004.
- ラファエル・アフイラロ『カバラ辞典』  
Rabbi Raphael Afilalo. *Kabbalah Dictionary.* Montreal : Kabbalah Editions, 2005.

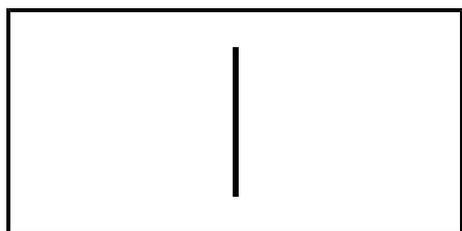
# 実践講座

## 6 カバラ十字と位階のサイン

### (1) 準備訓練

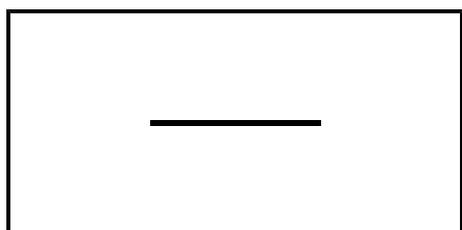
マリリン・ファガーソンのトレーニング法を紹介する。これは抽象的観念が具体的な身体反応にどう結びつくかを体感するものだ。説明文は、ファガーソンのものにさらに手を入れてある（ファガーソン自身はスチュアート・ヘラーの作品を参考としている。）。(96)

#### ステップ1



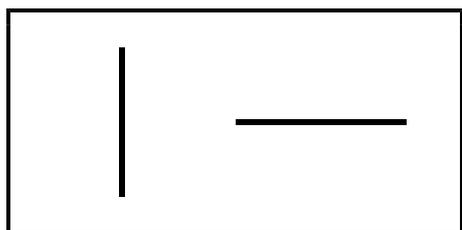
左図の垂直な線を見つめて下さい。  
この上下に伸びる直線に自分のところと軀を合わせて下さい。線を見つめ、あなたの身体すべての筋肉を変えてみて下さい。背が高くなり、痩せてきたと感じますか？

#### ステップ2



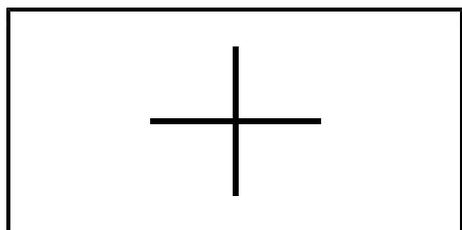
左図の水平な線を見つめて下さい。  
この左右に伸びる直線に自分のところと軀を合わせて下さい。線を見つめ、あなたの身体すべての筋肉を変えてみて下さい。背が低くなり、太ったと感じますか？

#### ステップ3



左図の2本の線を交互に見つめて下さい。  
線を見つめ、あなたの身体すべての筋肉を変えてみて下さい。垂直な線を見つめたときと、水平な線を見つめたときでは、肉体の反応は違いますか？

#### ステップ4



左図の2本の線を同時に見つめて下さい。  
線を見つめ、あなたの身体すべての筋肉を変えてみて下さい。垂直、水平な線を同時に見つめたとき、あなたの肉体にどのような反応が起きますか。周囲を見回し何か垂直なものを見つけ筋肉を変え、水平なものを見つけて筋肉を変えて下さい。

(96) マリリン・ファガーソン『マインド・チェンジ』たま出版、1994年、68-69頁。



この祈りの文句を、「主の祈り」の最後の行で代替することができる。

弟子に祈祷の方法を問われたヨシュア（イエス）の回答（『ルカによる福音書』11章1）が、キリスト教徒の祈祷の原型となった「主の祈り」（Lord Prayer、Pater Noster）である。

この祈祷文のヘブル語版（アラム語版）は、伝承されていない。ウィリアム・バークレーは、原型となったユダヤ教の祈りにイエスが新たな意味を加えて作り上げたと結論している。<sup>(97)</sup>

しかし、最近の研究により、対応するヘブル語の文章が類推、復元された。仏教哲学では、サンスクリット語原本が失伝した経本を中国語訳、チベット訳などの1次訳書から復元することを「還梵」というが、さしずめこの作業は「還猶」である。

### 主の祈り（復元）祈祷文<sup>(98)</sup>

AB INV Sh B Sh MIM I Th Q D Sh Sh MK  
アビーヌ シェバシャマイム イトカデシュ シムハ  
天にいますわれらの父よ、御名が聖とされますように、

Th ML IK ML KV Th K IO Sh H RT z VNK  
タマリフ マルクトーハ イオソーハ ラツオン  
御国を統治され続けますように、御心が行われますように

B Sh MIM VBART z  
バシャマイム ウバアレツ  
天においても地においても

ATh L Ch M Ch V QNV Th N LNV HI VM  
エトー レシエム コケーノー セーン ラノー ハイーム  
われらのなくてはならない食物を今日与えたまえ

VM Ch VL LNV ATh Ch VB V Th IN V  
ボムホール ラヌー エトー コボティヌー  
われらの負債を赦したまえ

K A Sh R M Ch LNV GM AN Ch NV L Ch I I B IN V  
カシェール マカレヌー ゴム アノコヌー レカイーベイヌー  
わたしたちに負債のある者を、わたしたちが赦しましたように

VAL Th B I AN V L I D I NS I V N  
ヴァル テビエヌー リッディー ニサイオーン  
わたしたちを試みに遭わせないで

ALA Th T z I LNV MN HRO  
エラー タツイレヌー ミン ハーロー  
悪しき者から救いたまえ

さて、上記にはないまとめの章句が英語版にあり、広く流布している。



(97) ウィリアム・バークレー『主の祈りに学ぶ』日本基督教団出版局、1991年、47、48頁。

(98) ブラッド・ヤング『主の祈りのユダヤ的背景』ミルトス、1998年。（ルビは秋端）

**For thine is the kingdom, and the power, and the glory, for ever. Amen.**

しかし、これは欽定訳（『ジェイムス王版』）にはあるが、より文献考証を重ねた、RSVや共同訳には載っていない。

日本語で唱えるか、ラテン語で唱えるかは趣味の問題であるが、ラテン語版は以下のとおり。

額に触れ、「汝が上に (TU ES)」と唱える。

胸に触れ、「御国と (REGNUM)」と唱える。

右肩に触れ、「力と (ET POTENTIA)」と唱える。

左肩に触れ、「栄えあれ (ET GLORIA)」と唱える。

胸の前で手を握り合わせ、「永遠に (IN SAECULA SAECULORUM)」と唱える。<sup>(99)</sup>

指の間の短剣の切っ先を上げ、「アーメン (AMEN)」と唱える。

次に覚えるのは位階の合図（サイン）である。「ニオフアイトの敬礼」や「沈黙の合図」というのは、ニオフアイト位階に提示される合図（サイン）である。そのやり方は以下のとおり。なお、レウェリン版の有名な図版は、左右の足を描き間違えており、それをそのままコピーした解説書があるので注意されたい。

《黄金の夜明け》団の位階の合図は、そのまま「神の姿形」になっている。合図を送るときは、神の威厳と力を身に纏うのだということを忘れないように。

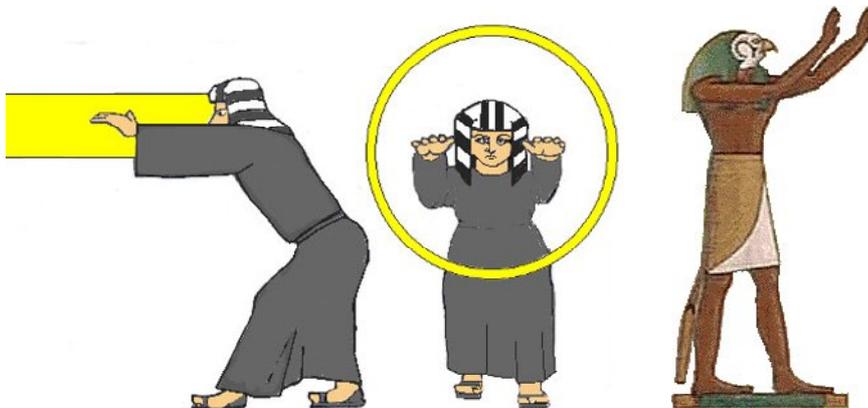
---

(99) 「オラーム」というヘブル語は、「世界」という意味と「永遠」という意味のふたつを有する。「永遠」という用法の場合は、『創世記』の9章16に見られるように、過去の契約が永続的に続くという意味をもつ場合がある。従って、エリファス・レヴィは『サンクトゥス・マグナム』において「aeterna」という訳語をあてた（真木悠介『時間の比較社会学』岩波書店、1997年、179頁。）。

### (3) サイン

#### a 《入場者のサイン》または、《ホルスのサイン》

志願者が手探りで進む姿であり、《ニオファイトの敬礼》とも言う。



その作りかたは、両手を脇に垂らし、足は6インチ（約15センチ）離して立つ。これは神の立像である。この姿形のまま意識を頭頂のケテルに集中する。（つまり、王冠を被っているように頭の上に光輝く球を想像する）

足で一漕ぎするつもりで左足を踏み出す。同時に、あたかも頭上の王冠（ケテル）に触れるように両手を上げる。

左足が床に着いたら、手を前方に降り下ろし、指先を真っすぐに手の平を下に、両手と視線が一致するように伸ばす。頭をやや屈め、両手の間から目標を見る。視線と指先から放射されるエネルギーが、前方に注ぎかけられる様子を視覚化し、感じることに。

これは天空の神ホルス。古きものホルス、すなわち、ラー＝ホール＝クイトが今にも飛び立たんと翼を前方に広げた姿である。その力強い羽ばたきをイメージせよ。

#### b 《沈黙のサイン》または、《ハーポクラテスのサイン》

ホルスのサインから引き続き実施する。

左足を素早く引き寄せてかかとを合わせる。背筋を伸ばし、左足で足踏みを一回。左手の人差し指を唇の下端中央に触れる。右手は、自然に下げる。このとき、自分がハーポクラテス神の巨大な立像となり、水蒸気に包まれてそびえ立つ様子を想像しなさい。ハーポクラテスまたは、ホール＝パール＝クラートは、《幼子ホルス》すなわち、イシス、オシリスの間に生まれた王位継承者である。身に強力な魔術を纏い。術者の沈黙の力を表象する。



《ホルスのサイン》が、意志力の放射、または攻撃に用いられるのに対し《ハーポクラテスのサイン》は防御に用いられる。

## 7 小五芒星の儀式

この小五芒星儀式こそ、世界で最も使用頻度の高い魔術儀式であろう。単純にして、効果的であり、利用範囲が広い。

召喚儀式を、Lesser Invoking Ritual of Pentagram ( L. I. R. P. ) つまり、小五芒星召喚儀式と呼ぶ。

また、追儼儀式を、Lesser Banishing Ritual of Pentagram ( L. B. R. P. ) つまり、小五芒星追儼儀式と呼ぶ。

小五芒星と言うのは、これに対応する五芒星の大儀礼があるからで、《黄金の夜明け》団では両方とも良く用いられた。

この儀式で用いられる五芒星は、いわゆる地の五芒星である。

小儀式においては四方位総てに、地の五芒星を用いる。

しかし、小儀式と言っても軽んじてはいけない。このなかには、儀式魔術の要素が凝縮して入っているからだ。

儀式の手順は以下のとおりである。

鋼鉄の短剣を右手に持ち、東に向かえ。

カバラ十字を切る。

東に向かい、中空に召喚の五芒星を描く。

続いて短剣の切っ先を五芒星の中心に向け、

神名ヨッド・ヘー・ヴァウ・ヘー ( I H V H ) を朗唱せよ。

このときに、汝の声が宇宙の東に向かうさまを想像せよ。

短剣を突き出したまま、南に向かい、五芒星を描いて、

神名アドナイ ( A D N I ) を朗唱せよ。

西に向かい、五芒星を描き、エーヘーイエー ( A H I H ) と朗唱せよ。

北に向かい、五芒星を描き、アーグラ ( A G L A ) と朗唱せよ。

東に戻り、最初の五芒星の中心に短剣の切っ先を戻すことで、円を完成させよ。

両腕を広げて立ち、次のように唱えよ。

我が前にラファエル ( R P A L )

我が後ろにガブリエル ( G B R I A L )

我が右手にミカエル ( M I K A L )

我が左手にアウリエル ( A V R I A L )

我が周りに五芒星が燃え

柱のうえに六芒星が輝く。

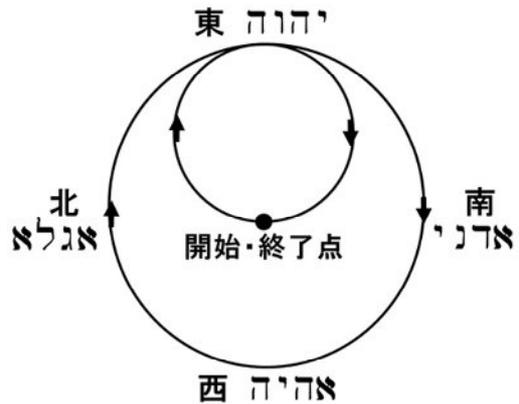
再び、カバラ十字を切る。

追儼の際にもこの儀式を用いよ。ただし、五芒星の描き順は逆となる。

一般に召喚は内向きの渦を、追儼は外向きの渦を形造る。その原点は、右廻りの周行を発動する円の中心である。儀式の場に適当な広さがないときは、踵を軸として回転するようになるが、基本的には部屋いっぱいの円を描くように運動するのだと覚えておいてもらいたい。追儼儀式の手順を述べる。



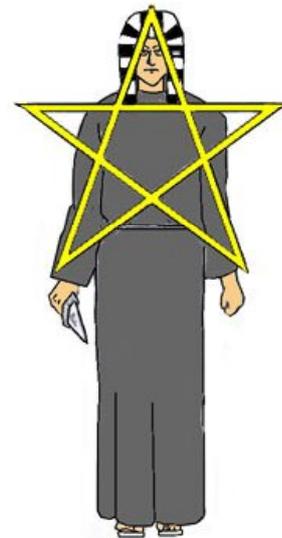
部屋の中心で、東を向いて立つ。ここが渦の起点である。外側の円に内接するような小円を右回りに描いて東に行く。東では、円の外側、東の方向を向いて、五芒星を刻印する。そのやり方は、腕を真っすぐ伸ばし、手を左の太腿付近から額の高さの頂点まで、そして右の太腿付近へ切り返し、逆「V」字を描くように空中に刻み込む。次に、手を体の左側の肩と同じ高さに戻し、そこから肩の高さで身体の中心を横切り、その右側まで水平に線を引く。手を左の太腿の位置に戻して五芒星を完成する。



動きに熟練してくると、呼吸と同調できる。つまり、息を吸うとき上向きの行程を、息を吐くとき下向きの行程を、そして止めて横切る行程を行う。

儀式的この部分の視覚化については、五芒星を燃える白（青白い、または黄金）の炎の線画として空中に描く。そして、その前では他の絵てのものが色あせるほど強烈に燃え上がらせる。あなたは腕を伸ばしたまま四方位から四方位へ周行する間、円の境界線を強く意識すること。各神名は、四方位で振動させるとき、喉を振動させ、腕と短剣を震わせ、五芒星の中心を飛び抜けて、宇宙の果てに聖なる波動として飛翔していく様子を、強烈に想像し、発音すること。（個人作業で声を出せないときは、有声と無声の振動が違うことを認識し、機会を捕えて有声の振動を肉体で感じる練習を積むこと）

- 東面したまま、最初の地の追躰の五芒星を描く。  
手を胸に戻すとき、息を吸い、五芒星の中心を刺し、息を吐ききるときに神名 IHVH（発音、ヨド・ヘー・ヴァウ・ヘー）（抑揚なし）を振動させる。
- 手を伸ばしたまま、南転し、同じ刻印を繰り返し、ADNI（アー・ドー・ナイ）を振動させる。
- 西転し、同じく繰り返し、AHIH（エー・ヘー・イエイ）を振動させる。
- 最後に北転し、同じく繰り返し、AGLA（アー・ガー・ラー）を振動させる。  
その後、手は伸ばしたまま、東に戻る。



- 「我が前に、ラファー・イイイイイ・エエル」を発音しながら、こちらを向いた大天使ラファエルを強く視覚化する。その性格は次のとおり。優雅で、動きが素早く、印象や雰囲気はくるくると変わる。ものごとに熱中する鋭敏な頭の持ち主。怪我人を治癒する力を持ち、大義に献身するものを勇気づける。将来の予期される危険を指摘する能力を持ち、刺激的で興奮させる気配をもつ。
- 「我が後ろに、ガー・ブリーイ・エエル」を発音しながら、肉眼では当然見えないが、自分の背後から、こちらを向いて立つ大天使ガブリエルを視覚化する。その性格は次のとおり。優美で流れるような仕草。にこやかな微笑みを浮かべ、共感を覚える顔である。寛容で寛大な態度。気を落ち着かせ、宥めるような物腰。いらついた感情を静める。冷静で、ゆったりとした感覚。
- 「我が右手（めて）に、ミカア・イイイイイ・エエル」を発音しながら、視野の右端に、こちらを向いて立つ大天使ミカエルの姿を捕らえる。その性格は次のとおり。果断で決然とし

た動き。指導者の面持ち。霊的、道徳的向上心を強調する。健康で引き締まった肉体。ぐらついた決断を補強してくれる。暖かく、拡張的な感覚。

- 「我が左手（ゆんで）にアウ・リイイイイイ・エエル」を発音しながら、視野の左端に、こちらを向いて立つ大天使アウリエルの姿を捕らえる。その性格は次のとおり。ゆっくりと慎重な動き。年長者の物腰。儀式ばった仕草だが、ときどき微笑みをこぼす。物知りで博学な頭脳。助言を与えてくれる。冷たく固い雰囲気だが、同時に頼もしく信頼できる。
- 「我が周りに五芒星は燃え」と発音しながら、四方の五芒星が再度活性化し青白い炎をあげて燃え上がる様を、心の目で同時に生き生きと感じとる。
- 「柱のうえに六芒星が輝く」と発音しながら、頭上に六芒星が同じく青白く燃え上がる様子を視覚化する。無理がなければ足下にも、もうひとつの六芒星が燃えている様子を同時に視覚化する。特に大天使の召喚は行われぬが、頭上の六芒星を守護するのは大天使メタトロン、足下の六芒星を守護するのは大天使サンダルフォンである。
- 最後に《カバラ十字》を再び切って儀式は終了する。

なお、蛇足ではあるが、イスラエル・リガルディーの記述と団の初期の記述で食い違う部分がある。旧資料の方が、実際とあっているようだ。

リガルディー資料

古い記述

我が前に五芒星が燃え上がり  
**Before me flames the Pentagram**  
我が後ろに六芒星が輝く  
**Behind me shines the six-rayed Star**

我が周りに五芒星が燃え上がり  
**For about me flames the Pentagram**  
柱の上に六芒星が立つ  
**And in the Column stands the six-rayed Star**

## 8 小五芒星儀式の応用

- 祈祷として用いる際は、朝に召喚儀式を、夕に追儼儀式を用いる。  
イスラエル・リガルディーはできる限り何度も小五芒星儀式を行えと助言している。召喚と追儼を繰り返していると、その部屋のなかに二重反転螺旋状の場が形成され、容易に反応する魔術神殿の基礎となる。神名を発音する際は、できるかぎり声を内にこもらせ、全身がその音で振動するように感じる。また振動波を目標となる方角の果てまで送り出すように心がける。
- 不浄な磁気に対する防護として用いる場合。追儼儀式は妄想や雑念の除去に利用できる。攻撃してくる妄想にイメージを与え、あなたの前にそれが存在すると想像する。続いて《ニオフアイトの敬礼》を用いて、そのイメージを自分のオーラから放逐する。それが1メートル以上離れたなら、《沈黙の合図》を用いてイメージの再侵入を阻止する。  
続いて、そのイメージを東の方角に想像し、五芒星追儼儀式を行って分解する。心眼をもって、それがあなたの炎の輪の外側で溶け去る様子を確認する。  
これは霊的（魔術的）攻撃に対する防御法であり、原因が何らかの攻撃的魔術であった場合、喚起された邪悪なエネルギーは攻撃をしかけた魔術師へ《逆行の流体》として弾き返される。
- 五芒星儀式は集中の練習としても使用できる。瞑想のための座位ないし、仰臥姿勢をとり、法衣をまとい短剣を手にして立つ自分自身の姿を公式化する。W・E・バトラー風に言えば、自分のアストラル体オーラを分割して、思念体を作るのである。これは強い想像力で実現できる。そして、公式化された自分の姿が十分に輝き始めたら、その姿に意識を移す。視点を見上げる位置や、眺める位置から、思念体の視点に移すのだ。そして、東に向かう。そこで壁に触ったり、目を開いたり、床を踏みしめたりして、自分がその場所にいることを「感じる」こと。  
儀式を開始し、部屋を回りつつ、心のなかで言葉を朗唱すること。言葉が公式化された姿から発せられているように感じる。こと。  
東において儀式を終え、星幽光のなかに生じた儀式の効果を確認すること。それから歩いて戻り、あなた自身の肉体の背後に立ち、肉体へ再吸収される。  
これは星幽体投射（Astral Body Projection）の訓練でもある。病気で身体が動かせないとき、周囲の黴臭い邪気を払うために、このやり方で防御の儀式をやっても良い。筆者が不意の高熱で倒れたとき、それを行うと低次の霊体がねばねばしたアミーバ状態に凝集したので、I H V Hの聖四文字に守護されるケルビムと燃える剣の力を借りて焼き払った経験がある。もちろん、心身とも正常な状態のとき行えば、前向きの訓練となる。

## 第5ヶ月目の瞑想

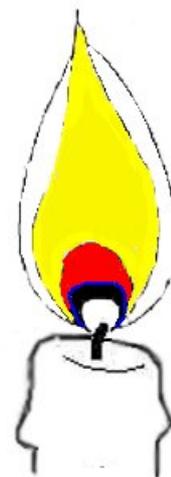
### 瞑想課題：炎の凝視

今月の瞑想は、先月に引き続き観想的技法の仕上げである。カバラの炎の瞑想では、単純な油のランプか、蠟燭の炎を凝視する。特別な設備は必要ないが、術者が行に入ると同時にこの質素な炎は七枝燭台を象徴する聖なる炎となる。

『ティクネ・ハ・ゾーハル』によると、炎の凝視の瞑想を行うときは術者は炎の五色を見分けねばならない。五色とは、白、黄、赤、黒、そして青である。

むしろ、物理的次元において五色の識別はできない。蠟燭の炎を見れば、白、黄、赤の光は容易に見てとれるだろう。それが自然な炎の色だからだ。しかし、黒と青は見分けるのが困難だ。黒は色ではない。むしろ、色の欠如である。従って、あなたは炎の周囲にある暗黒として黒を捕らえねばならない。『ゾーハルの書』には、「蠟燭を凝視せよ。黒き炎はその底部に、輝く炎はその頂部に見えるだろう」と書いてある。黒は炎が光を発しない部分にある。さて、青はさらに困難だ。ガストーチなどと違って、蠟燭に青い炎の部分はない。『ゾーハルの書』では青は黒の外側に、黒を越えた部分に出現すると書いている。炎の周囲に見える青い光とは、神聖の顕現シェキナーにほかならない。

赤、黄、白、黒は四つの炎と呼ばれ、四つの霊的光に対応している。すなわち、赤はバヒル、黄はゾーハル、白はムヴァク、そして黒はゾーハルを受ける光である。『出エジプト記』33章18において、「あなたの栄光をお示し下さい」と懇願したモーセに対して主が示した栄光が、この四種の光であり、その地上的反映が4種の炎である。既に、黒い炎は物質の衣をもたない。それでは青の炎は何か。青は予言者や、神秘家を訪れる色である。古代のユダヤの祭司は青の房飾りを身に纏った。『タルムード』に曰く、「房飾りは青。青は海の色。海は空の色。空は栄光の御座の色」である。



第1週は、暗くした部屋に蠟燭かランプを用意して、楽に座りながら、その炎を凝視する。蠟燭は壁から十分に離しておくこと。そして、観想的技法を用いて、炎が心の全てを占めるように見つめ続ける。白、黄、赤の炎の分光を細部にいたるまで観察し、その輝きを実感する。炎から放射される熱とエネルギーも感じられるだろう。そして、物理的な視野を越えれば、この炎の無形のエネルギーそのものに触れることができるだろう。

第2週～第3週は、炎の周囲の暗黒部分に意識を集中する。見えない部分への意識集中であり、すぐにむず痒い感覚が襲ってくるだろう。しかし、全力で《黒い炎》に集中すること。ピロードの黒、なめらかな質感を保った闇そのものの凝集。『ゾーハルの書』では《闇のランプ》とも言われた技法である。

第4週は、《黒い炎》の彼方に《青い光》が見え始めたときに開始する。青は、炎の外郭の黒のさらに外側に現れることを忘れないように。目の疲れや、ガラスの反射で、炎の内部に生じた青は本物ではない。この青は、快晴の空の青である。想像しうる限り最も美しい深い夏の青空が、非物質の青として出現する。

もし、月のうちに青や黒を明瞭に見ることができなくても、落胆することはない。これは、かなり困難な技法である。どこまで見えたかより、見る過程において生じた様々な反応を克明に魔法日記に記録しておくこと。重要なのは見えないものを見ようとして努力することにより生じるあなたの内部の変化である。

# 今月の読書

今月の学習の参考になる著作は、以下のとおりである。

## 1 必読図書

今月の学習の参考となる著作はありません。

## 2 推薦図書

自分のできる範囲で読む努力をして下さい。

中山正和著 『禅と脳』 PHP研究所、1984年。

金子隆芳著 『色彩の心理学』 岩波書店、1990年。

**Highfield, A.C. *Book of Celestial Images*. Wellingborough : The Aquarian Press, 1984.**  
(ややレアものですが、未だ入手は可能です。)

## 第5ヶ月目の課題

この課題は、今月の作業が終了した後に記入しなさい。記入した課題は魔法日記のコピーと一緒に提出すること。

- 1 大天使と天使の役割を整理しなさい。
- 2 魔王と悪魔の役割を整理しなさい。
- 3 大天使SBVIALのテレズマ的イメージを作成しなさい。
- 4 四大の大天使のそれぞれから受ける印象を書きなさい。
- 5 カバラ十字を実際に切ったときの肉体的感覚、霊的感覚を述べなさい。
- 6 小五芒星の召喚及び迫難儀式をそれぞれ行い、印象を述べなさい。
- 7 集中の訓練で思念体を作り、その感覚を述べなさい。